

フランスで最初に著作権者人格権が 認められたという事件簿

—James McNeill Whistler, *Eden versus Whistler:
The Baronet and the Butterfly.*

*A Valentine with a Verdict, Paris and New York, 1899—*¹⁾

松川 実

- 1) フランスの破毀院で、1900年に公表権が認められたウィスラー事件判決があった。フランスで公表権が制定法上、初めて認められたのは1957年法であったが、この1900年破毀院 *Whistler v. Eden*, Cass. ch. civ., Mar. 14, 1900, D.P. 1900, I, 497 事件判決は、制定法よりも50年以上前に公表権を認めた判決である。この事件は、マサチューセッツ州ローウェリア出身で、イギリス美術家協会会長も務めた画家ジェームズ・マクニール・ウィスラー (James Abbott McNeill Whistler, 1834–1903) は、ウィリアム・エデン卿 (Sir William Morton Eden, 7th and 5th Baronet, 1849–1915) から妻の肖像画を描くように頼まれていたが、完成した肖像画を報酬額が少な過ぎるといって引き渡すことを拒否した。裁判の直前か途中で、ウィスラーは絵からエデン卿の妻の顔を消し、別の女性の顔に書き替えた。破毀院は、契約があるが、すでに受領した報酬の返還を命じたが、絵画の引き渡しは認めなかった事件である。この事件は、フランスやイギリスだけではなく、アメリカでも新聞等で大々的に報道され、その上、ウィスラーは、原審であるパリ控訴院での顛末の暴露本まで発行した。本翻訳は、この暴露本の翻訳である。

ウィスラーの主張は、(i) エデン卿が妻の肖像画には100ポンドが妥当な金額と値踏みしたことは、芸術家には挑発的な金額である。ウィスラーが絵の引き渡しを拒否したのは、単なる拒否だけではなく、それなりの芸術家の権利を主張したに過ぎない。(ii) 100ポンドでは、これは一種の慈善契約である。(iii) 慈善契約が破綻したのであるから、その絵を保管できないのか。(iv) 慈善契約が破綻しているのであるから、レディー・エデンの首を消して、他の誰かの首に据え替えて、その絵を自分で保管する権利はないのか、というものであった。

《当事者等》

原告（被控訴人）：ウィリアム・エデン卿（Sir William Morton Eden, 7th and 5th Baronet, 1849-1915）

原告側訴訟代理人：ブロー（Maitre Bureau）

被告（控訴人）：ジェームズ・マクニール・ウイスラー（James Abbott McNeill Whistler, 1834-1903）

被告側法廷弁護士：ラティエ（Maitre Ratier）

被告側訴訟代理人：バーデリー（Maitre Beurdeley）

第1審裁判所：セーヌ民事裁判所第6小法廷

判決日：1895年3月20日

第2審裁判所：パリ控訴院裁判所第1小法廷

裁判官：ル・プレム

判決日：1897年12月

メイトル・バーデリー弁護士（Maitre Beurdeley）の陳述

裁判長：「本件訴訟の目的をご説明下さい。」

バーデリー弁護士：「セーヌ民事裁判所で、注文した絵を届けなかった画家に対して判決が下されました。この裁判では、画家は絵の代金を返金し、絵そのものを引き渡し、損害賠償とその利息を支払うことになりました。我々は、この3倍賠償（triple penalty）を過大なものとして訴え、裁判所に判決の取り消しを求めます。これが我々の提訴の目的です」。

裁判長：「あなた方は絵を引き渡すことを申し立てますか。」

バーデリー弁護士：「反対に、判決により、我々は代金の返済と絵を引き渡さなければならず、それに抗議します。その絵が修正され、芸術家のアイデアが不完全に表現されている絵は、この事情では、最初に注文した人に引き渡すことができません。ここで、私の依頼人であるウイスラー氏と訴訟相手方のウィリアム・エデン卿との関係をご説明します」。

「ウイスラー氏の声望は、幸いなことに、私からの賛辞を必要としないほどです。この訴訟が提起されるずっと前から、ウイスラー氏は完璧な紳士であり、完璧な芸

術家であるという名声を確立していました。ウイスラー氏は、『パリ・シャンドマルス広場 (Champ de Mars)』で展示された作品や、さらに、リュクサンブール美術館 (Le Musée du Luxembourg) で、彼の芸術作品の常設展示によって、我々の間でもよく知られています。リュクサンブール美術館の最高傑作である『母の肖像 (Portrait of his Mother)』は、彼の力を見事に証明しています。

「ウイスラー氏は、イギリスやアメリカだけでなく、レディーオン・ドヌール勲章 (Légion d'honneur) を授与され、フランスでも高い名声を得ています。リュクサンブール美術館の『母の肖像画』のほか、『アレクサンダー嬢 (Miss Alexander)』、『黄色いバスキンの女性 (Yellow Buskin)』、『サラサーテ (Sarasate)』(これは傑作です)、『トーマスカールイル (Thomas Carlyle)』は、誰もが知っている作品です。ウイスラー氏は、さらに、批評家たちによって盛んに議論されたり、タイトルだけですが、世間の注目を集めた他の作品でも著名であります。ある評論家は、ウイスラー氏が絵画に音楽を導入したと言っています。確かに、ウイスラー氏は、自分の絵に『シンフォニーズ (Symphonies)』や『ハーモニーズ (Harmonies)』という名前をつけたことがあります」。

「ウイスラー氏は、有名な訴訟のヒーローとしても著名です。すべに我々の反対者が指摘していますが、その訴訟で争点となったのは、著名な評論家であるラスキン氏 (Ruskin) によるウイスラー氏への攻撃でした」。

「ウイスラー氏は、筆を置いて、ペンを持つことが多いのですが、本を発行しました。その本は、イギリスで広く読まれ、この訴訟のきっかけになった議論のおかげで有名になりました。ウイスラー氏は、一方では自分に対するすべての批判を集め、他方では、それら批判に対して自分が与えたすべての回答を集めました。この名著には『敵を作る穏やかな技 (The Gentle Art of Making Enemies)』というタイトルが付けられています」。

「ウイスラー氏とウィリアム・エデン卿との間で始まった関係はどのようなものであったのか。私の訴訟相手方や、あなた方裁判官には、ウイスラー氏の功績を是非知ってもらいたいと思います。その人物像はこの訴訟の過程で明らかになるでしょう。ウィリアム・エデン卿は、明らかに、裕福な男爵で、その財産の一部をイギリス人が愛するスポーツを楽しむために捧げていますが、同時に絵の趣味もお持ちのようです。エデン卿は、ウイスラー氏が描く妻の肖像画を所望した。エデン卿は、

すでに、ブランシュ氏 (Blanche) やスワン氏 (Swan) などの著名な画家に同様の性質の依頼をしていましたが、彼らは、後にウイスラー氏が、そうするように勧誘されたように、レディー・エデンの特徴をキャンバスやパネルに複製しました」。

「芸術家への注文を切望して、ウィリアム卿は、ウイスラー氏には全く知られていなかったが、すぐにロンドンのグーピル (Goupil) の会社の代表に手紙を書いて、エデン卿の夫人の頭部だけの小さな肖像画をウイスラー氏に注文する場合の価格を尋ねて、キャンペーンを始めました。そして、ここでは、みなさん、我々には、グーピルからの連絡を受け取ったウィリアム卿の謝辞があります」。

エクス・レ・バン (Aix-les-Bains), 1893年6月5日

殿

ウイスラー氏によるレディー・エデンの肖像画にかかる費用についてのお便り、ありがとうございます。

私はウイスラー氏の功績を十分に認め、評価していますが、彼の頭部のみの肖像画の料金が「25ポンド」よりもはるかに安くなることを期待していました。したがって、私は、その価格では、頭部のみの肖像画を考えることができません。なぜなら、特に、スワン氏にこの分野で、すでに多額の支出をしているからです。もし、ウイスラー氏のパリの住所を教えていただければ、ウイスラー氏にお会いに行きたいと思っています。敬具

ウィリアム・エデン

追伸: Hotel des Trois Couronnes 宛てにお手紙を書いて下さい。

ウィリアム卿は、レディー・エデンのただの頭部に500ギニーは高すぎると考えたが、それでもウイスラー氏本人からもっと有利な条件を提示してもらい満足するのではないかという希望を捨てなかった。その時、ウィリアム卿は、新たな人物を登場させた。ウィリアム卿は、共通の友人である評論家のジョージ・ムーア (George Moore) に、十分に巧妙且つこびた方法で申し込んだ。このムーアという評論家は、ウイスラー氏と自分を重ね合わせて、次のように述べています。「これは私の友人のための作品であり、もう一つは、あなたが喜んで引き受けてくれるであろう、とて

も愛らしく、とてもエレガントな女性を描かなければならないということです」。私は、訴訟相手方の涙に答えて、レディー・エデンは、この件に関して全く非難されるべきではないと言いたいと思います。「この状況下では、あなた（ウイスラー氏）は非常に寛大な譲歩をすることができると思います」と、ムーアは言った。

ウィリアム卿から、最終的な価格の提示を求められたことに対して、ウイスラー氏は、あなた方裁判官も十分に理解できるような手紙を送ってきました。これは、先に述べた金額にもかかわらず、本件訴訟がお金の問題に基づいていないことを示しています。ウィリアム・エデン卿とウイスラー氏の争いは、まったく別の問題に起因しています。

皆さん、これがウイスラー氏の手紙です。彼の契約を具体化した手紙で、彼はこの契約内容を実行し、現在の訴訟の原因となっています。

ウィリアム・エデン卿はウイスラー氏に紹介された。彼らは、面会し、肖像画の問題について話し合っ、そしてウイスラー氏は1894年1月6日に次のような手紙を書きました。

1894年1月6日

親愛なるウィリアム・エデン卿

貴殿の手紙は、私に手渡されたばかりか、これで、もしかしたら、このご返答は午後にはあなたに届くでしょう。小さな絵についてはよく理解されていますし、金額についても問題はないと思います。本当に興味深い点は、私が、レディー・エデンの助けを借りて、期待されるような魅力的な絵を描くことだけです。カーノ(Cahno)が言ったように、一度引き受けた仕事は、どんなに些細なことでも、私にとっては1つの仕事が他の仕事と同じくらい、いやそれ以上に重要なのです。金額については、ムーアは、100ポンドから150ポンドと言っていたような気がします。

これはどういう意味でしょうか。我々は、この手紙の口調と意味を完全に理解するために、この手紙を注意深く検討すべきでしょう。ウイスラー氏が言うには、「私がある種の譲歩をしたことで、我々の間には何の問題も生じないと思いますし、価格についても完全に合意する必要があります。作品の重要性については、あなたは、私が頭部だけを描くか、全身を描くかで悩む必要はありません。スケッチなのか、

完成した絵なのかは聞かないで下さい。どちらもアーティストにとっては同じように重要です。アーティストは一つの作品を請け負うと、自分が納得するまで練り上げていきます」。

価格については、ムーアとウィリアム・エデン卿との会話の中で、出てきた額は100から150ギニーでした。この手紙の私の解釈を疑う余地のないものにするために、もう一度読み返してみると、私が正確に翻訳していることがわかるでしょう。

[バーデリーは、その手紙をもう一度読み直した。]

ご覧のとおり、最初に頭部に要求された500ギニーの代わりに、100ポンドから150ポンドの問題でした。100ギニーは、これから議論しなければならない額です。100ギニーは、105ポンド、あるいは2,625フランです。

ですから、この件に関してウイスラー氏の目的はお金ではないと言ったのは正しかったのです。ウイスラー氏の寛大さ、つまり、ウィリアム卿とレディー・エデンへの寛大な対応が、どのように報われたか、おわかりいただけると思います。

ウイスラー氏は、仕事に取り掛かり、私が、今、あなた方の前に置いた絵が不完全であるか否かにつき、あなた方の判断する役割が完了しました。その絵の中には、新しい顔と新しいアンサンブルがオリジナルに取って代わっています。しかし、あなた方は、今、そのアレンジメントと、まさに、トリートメントに展示された個人的な芸術の素晴らしいハーモニーさえ認めるだろうと、私は考えます。1つの芸術、それは、それ自身が、貴族の婦人が座っているが、その婦人の特徴は、未完成の作品においてさえ、彼女に完全にふさわしい環境の中であることがお分かり頂けるでしょう。

肖像画がほぼ完成した1894年2月14日、ウイスラー氏はウィリアム・エデン卿の訪問を受けました。イギリスにおけるこの日付とその特別な重要性に特に注意を払う必要があります。2月14日は聖バレンタインのお祭りです。イギリスでは、この日の習慣として、小さなプレゼントを贈ったり、小さな賛辞を交わしたり、その際、花やブーケ、色のついた厚紙や名刺のようなものを添えることもあれば、ダイヤモンドの装飾品や宝石、あるいは大金など、より高価なものを贈ることもあります。この古くからの伝統は、今でも海峡を跨いで受け継がれています。私の資料の

中には、昔ながらのバレンタインと現代のバレンタインのサンプルがあります。それらのサンプルは、主に、絵付き紙のシートで構成されており、次のようなメッセージがあります。たとえば、「愛を込めてお送りします」とか、あるいは、「私のバレンタイン、私はあなたに私の人生を与え、私にあなたの愛を与えます」というように、銘文とともに、カードのシートからなっています。

聖バレンタインデーは、友人や恋人同士がプレゼントを交換するのに適した日でしたが、ウイスラー氏は新しい友人、ウィリアム・エデン卿の訪問を受けました。ウィリアム卿は、この画家がこの絵を描いているところを見て、「この肖像画は魅力的だ。それは、私がそれを見るたびに嬉しいです。私は、完全に満足しています」と言いました。休暇を取って、ウィリアム卿は、自分が、スポーツ旅行のためにインドへ出発するところであると、ウイスラー氏に伝えた。そして、ウィリアム卿は、自分のポケットから、封筒を取り出して、それをウイスラー氏に渡して、「ここに、あなたのためのバレンタインです。私が行った後、それをすぐに見て下さい」と言った。今は、気にしないで下さい。ウィリアム卿が帰った後、ウイスラー氏はその手紙を開きました。その中には、事前の交渉で言われていた最低額の100ギニーの小切手が入っていました。

皆さん、私が2度読み上げた手紙の条件を考えると、ウイスラー氏がどんなに肖像画に気を配っても、また、どんなに完璧な芸術作品を作っても、150ギニーという金額を受け取ることが、道徳的に義務づけられていたことに、私は一瞬たりとも異論はありません。最大値が合意され、最低値も合意されました。しかし、厳密に法的な観点からこの問題に注目することなく、このアーティストは、確かに、少なくとも、あらゆる礼儀の法則によって、自分自身が、最大値と最小値の間の平均値を決めるのに最も適しているのは自分自身だと考えたはずです。その著作物の製作に関わった他に類を見ないほどのスキル、知識、芸術的メリットを知っている自分こそが、最高、最低、または何らかの中間価格を尋ねる必要があるかどうかを決定することが合理的に許されるかも知れない。さて、実際に何が起こったのでしょうか。ウィリアム卿は、親しみを込めた褒め言葉や優美な小さな礼儀に格好をつけて、バレンタインを装って最小額を彼の手渡し、ウィリアム卿は、自分が利益を得べき作品の価格を決める権利が自分にあるのだと主張しています。

ウイスラー氏が当然言ったことは、「私はだまされた」と。私が相手にしてきたの

は、友人でもなく、紳士でもなく、詐欺師でした。ウィリアム卿は自分のことをとてもかわいいと思っていますが、私は彼にかわいさのレッスンをしてあげましょう。ウィリアム卿は私にバレンタインを持ってきてくれましたが、私は是非ともそれを受け取りました。バレンタインとは、友情の証として贈るプレゼントであり、ささやかなものであります。私はそのプレゼントをそのように受け止め、何が起るか見てみました。このような考えのもとに、ウイスラー氏は、同じ日、つまり、1894年2月14日、ウィリアム・エデン卿に次のような手紙を出すことにしました。しかしながら、このあなたへの手紙を読む前に、100ギニーの小切手に同封されていたメモを読んでみましょう。

4, Rue de Presbourg, Paris,
1894年2月14日

親愛なるウイスラー様、ここに、あなたへのバレンタインに、100ギニーの小切手をお持ちしました。この絵は、私にとって計り知れない価値があり、家宝としていつまでも受け継がれていくことでしょう。私は、妻の絵を、いつもこの絵を楽しみにしています。敬具

ウィリアム・エデン

ウイスラー氏は、筆を置き、ペンを握り、次のように書きました。

110, Rue du Bac, Paris
2月14日

親愛なるウィリアム卿。あなたのバレンタインを受け取りました。あなたは本当に素晴らしい人です。そして、すべてのラウンドで得点しました。私はこの小さな絵が、我々全員にとって少しでも価値のあるものであることを願うばかりですが、私は、我々が知っているいくつかの最後の仕上げを追加させてくれるレディー・エデンの優しい約束が頼りです。レディー・エデンは、自分の役目を果たすために、ずっと勇気と優しさを持ち続けて下さいました。あなたの旅の成功を祈っています。

敬具

J. マクニール・ウイスラー

皆さん、この返答の辞の真意をご理解いただけると思います。次の日に起こったシーンが証明したように、それは明らかな皮肉でした。ウィリアム卿は、この手紙にあまり満足していなかったので、この画家のアトリエに行き、1つのシーンが起きました。つまり、詳細な部分には異議を唱えたけれども、一般的な流れには全く争いがなかったというシーンです。このインタビューについての我々の説明は、我々の相手方によって、次のように訂正されました。ウイスラー氏はエデン卿を迎え容れようとはせず、ウイスラー氏は、ただ「あなたは素晴らしい」と何度もこの文章を繰り返して言ったそうです。

皆さん、事実として、このインタビューは、このように簡単なものではなかったはずで、翌2月15日、ウイスラー氏はウィリアム卿をアトリエの玄関で迎えました。まず、ウィリアム卿が以下のように言いました。「私はあなたから理解できないお手紙、とても失礼なお手紙を受け取りました」。『私はあなたのバレンタインを受け取りました』とは、どういう意味でしょうか。あなたは私にバレンタインを送った。私はそれをご丁寧に認めます。「私は、あなたの手紙を無礼だと思えます」。すると、ウイスラー氏は、ウィリアム卿をすべて満足させようと思い、ウィリアム卿が完全に好きなように、してやることにしましたが、ウィリアム卿はインドへの旅が迫っていることを思い出した。ウイスラー氏は「自分は行かないので、ウィリアム卿を待っています」と言った。しかしながら、ウィリアム卿は、100ギニーか150ギニーかについて議論し始めた。

これが、1894年にウイスラー氏が、シャン・ド・マルス (the Salon of the Champ de Mars) のサロンに、この絵を展示したとき、諸問題がその時までには解決した方法です。そして、ここで、その絵が展示された条件を説明させていただきます。

この絵は、もちろん、ウイスラー氏のアトリエを離れることはなかった。なぜなら、面会の翌日には、ウィリアム・エデン卿はインドでの撮影に出かけ、帰国したのはその年末であったからです。したがって、この絵を何点かの他の作品と一緒に展示したのは、ウイスラー氏自身であり、この絵をシャン・ド・マルスに送ったのも、その絵を運び出したのも、アトリエに戻したのも、ウイスラー氏自身でした。

この肖像画は、カタログではNo.1187として記載されています。「ブラウンとゴールド。E夫人の肖像…… (Brown and Gold. Portrait of Lady E...)」。

前述のように、ウィリアム・エデン卿は、1894年の年末まで、インドから帰国し

なかった。その後、エデン卿は、ウィスラー氏に召喚状を送り、その絵の引き渡しを要求した。私は、ここに召喚状を持っています。ここでは、その後の手続きを考慮して、ウィリアム・エデン卿によって主張された内容を説明するのがよいでしょう。

ウィリアム卿は、バック通り110番地(110 Rue du Bac)のウィスラー氏に召喚状を届け、それによって、「24時間以内に、請求人であるエデン卿が注文したそのレディー・エデンの肖像画を請求人に引き渡すように」命じられた。そして、ウィリアム卿は、証明されたように、105ポンド、つまり、フランスのお金では2,625フランの価格を支払った。請求人は、仮に、その絵が直ちに引き渡されない場合には、必要な手続きを取るとの警告を発した。

翌日、ウィスラー氏は、ロンドンの事務弁護士と、本件を委託した法廷弁護士メイトル・ラティエ(Maitre Ratier)を介して、105ポンド、あるいは100ギニーの額を返送し、ウィリアム・エデン卿がその金銭を自由に使えるようにした。

その瞬間からウィスラー氏は、かつての顧客に対する義務から解放されたと考えた。ウィスラー氏は、あなた方が今、目の前で見ている絵を自分で持っていたが、それは、室内で、レディー・エデンを描いた絵であり、あなた方にもその作品をご理解いただけたと思います。この作品は、この画家自身が特別な思い入れを持っていた作品であり、1894年の展覧会で「ブラウンとゴールド」というタイトルで公開したときに、その画家自身には特別な意味があった作品です。この芸術家は、自分が創作したこの作品、このアレンジを失いたくないと思った。ウィスラー氏は、完全に自分自身の作品とみなした作品を残したいと考え、慎重に消去して、その作品を修正し、いわば自分の作品の基礎部分だけを残して、レディー・エデンの顔や姿を描き出した。その後、極めて慎重に、その画家は、自分の画筆の技能、特徴、インスピレーションのすべてを同じ画布の新たな肖像画の創作に注ぎ込み、別の人物をスケッチしました。その当時、パリにはヘイル(Hale)という紳士がいて、彼は自分の妻の肖像画を欲しがっていました。ウィスラー氏の画布に描かれている、いや、正確にいえば、これから描かれようとしているのは、このヘイル夫人の肖像でした。ご覧の通り、この絵は全体も細部にも全く未完成でした。それから、ウィスラー氏は、原画に新しい絵を置き換え、全体的な配置はそのままにして、細部を修正して、この新しい人物にふさわしい背景を描きたいと考え、ついでに後世の人々の喜びを

確保しようとした。一応いっておけば、その絵の右側に描かれた花は、ウィリアム・エデン卿自身が指摘しているように、前回、エデン卿がこの絵を見た後に、追加されたものです。

これが、1894年に、我々がセーヌ民事裁判所 (the Civil Tribunal of the Seine) に出廷するように命じられた事情です。ウィリアム・エデン卿は、すでに発布されていた召喚状を確認し、絵の引き渡しと、1,000フラン (40ポンド) の支払いとそれに対する利息付きの損害賠償を要求した。

我々は、すぐに応答し、事実として、ウィスラー氏はその絵を抹消して、レディー・エデンの肖像画としては、もはや存在しないと述べた。私は、その作品が部分的に消去され、まだ完成していない新しい作品に置き換えられていることを説明しました。

ウィリアム・エデン卿は、ここで自分の主張の根拠を変えました。ウィリアム・エデン卿は、絵に支払った100ギニーの返還と、さらに、1万フラン (400ポンド) の損害賠償とその利息を要求してきました。2月15日、ウィリアム・エデン卿は、さらにいくつかの訴えを追加しました。ウィリアム・エデン卿は、その当時のままでその肖像画の引き渡しを要求し、最終的には1895年3月6日、裁判所が、仮に、その絵はもはやレディー・エデンを表現していない、あるいは、今は、誰か別の人物を表現していると認定した場合には、その絵の破壊を命じることを求めたが、裁判所には、その占有に対するエデン卿の請求を執行するため権限はなかった。

ここで、マイトレ・ビュールデリーは、手続きの報告書を詳細に朗読することを提案したが、裁判長は、1895年3月20日の下級審裁判所が様々な争点について宣告したその判決を朗読するように示唆した。

裁判所は、そこで、休廷に入った。

本件審理は、翌日、マイトレ・ビュールデリーによって、次のように再開された。

皆さん、昨日の審理の終わりに、私は、1985年3月20日に第6小法廷が下した判決を、本法廷に提出しておきました。

しかし、ご存じのように、私は、第6小法廷の判決がそれまでどのような手続きを経てきたのかを説明する時間がありませんでした。そのため、少し前に戻って、問題となっている様々な争点が本裁判所に、どのような順序で提出されたかを説明することをお許し頂きたい。

私は、11月8日、ウィリアム・エデン卿によってウイスラー氏に召喚状が出されたことは、すでに皆さんにお話しました。その召喚の目的は、この絵を手に入れることでした。翌日の1894年11月9日、我々は、銀行員と事務弁護士を通じて105ポンドを速やかに返却しました。私は、本件のすべての証拠書類を持っていますし、訴訟の相手方もそれらの証拠書類を検査しています。11月20日、我々はセーヌ民事裁判所に出廷するよう命じられ、ウィリアム・エデン卿は、絵の返還と1,000フラン(40ポンド)の損害賠償とその利子を要求しました。我々は、レディー・エデンの肖像画としての絵はもう存在しないと回答しました。皆さん、以上が、我々の主張の正確な内容です。ウイスラー氏は、100ギニーを返却した後、それでもうウィリアム・エデン卿に対してすべての義務から解放されたものとみなして、ウィリアム・エデン卿の行動と、その状況一般を考慮に入れて、さらに、ウイスラー氏は、全体の構図だけを残して、レディー・エデンの顔を塗りつぶし、そこには、別の人物の顔を挿入するつもりでした。

あなた方は、この声明が全く正確ではなく、したがって、我々が、後になって、それを訂正したことを理解されるでしょう。弁論趣意書は、弁護人に英語で与えられた指示に基づいて書かれたもので、それは完全には理解されていなかったし、完全に翻訳もされていませんでした。私が、ウイスラー氏にそれらの弁論趣意書を見せたとき、ウイスラー氏は、「これは全く正確ではない」と言っていました。あなた方は、我々がその不正確さをどのように修正するかを見るでしょうが、しかし、我々が修正する前に、ウィリアム・エデン卿は、1895年2月26日に行った弁論で、訴訟に全く新しい展開をもたらしました。つまり、エデン卿は次のように述べました。つまり、「この異常な事実(すなわち、絵の改変)を考慮すると、原告としては、自分の主張を修正し、利息付きの損害賠償を求める必要に迫られている」といいました。したがって、エデン卿は、2,625フラン(105ポンド)の返済と、1万フラン(400ポンド)の損害賠償金とその利息の支払い、さらに訴訟費用の全額を請求してきました。肖像画の引き渡しはもはや主張されていません、それは、明らかに問題外でした。

その翌日の1895年2月27日、ウィリアム・エデン卿は、この点を考え直しました。エデン卿は、裁判所に対して、自分の最初の訴えが速やかに認めるように請求しました。つまり、(1)仮に、レディー・エデンの肖像画が、ウイスラー氏が主張

するように、損傷されてしまったと証明されたならば、その肖像画を現状のまま引き渡すこと、仮に引き渡しが遅延した時には、1日100フラン(4ポンド)とその利息という罰金を支払うように命じること、あるいは、(2) ウィスラー氏に対して、その絵のために与えられた100ギニーの額とそれに対するその額が支払われた日以降の利息を原告に返却すること、さらに、1万フラン(400ポンド)の損害賠償額とその利息を支払うよう強制することを求めた。

我々は、今、ウィスラー氏自身の訴答を修正することになりますが、この訴答は、ウィスラー氏の主要な立場を修正するものではなく、作成された陳述書の不正確さを修正するものです。

「ウィスラー氏は、ウィリアム・エデン卿が、自分にレディー・エデンの肖像画を描いてほしいと依頼してきた事情を理解してほしいと考えています」。

「自分(ウィスラー)は、最初に提案された価格を極めて例外的に引き下げることに同意しました」。

「自分は、ウィリアム卿が希望したように、頭だけでなく姿全体を描き、これには、ウィリアム・エデン卿も大いに満足されていました」。

「ウィリアム卿はウィスラー氏との手紙のやり取りの中で、話された最低限の金額をウィスラー氏に渡しましたが、それは、ウィスラー氏には友好的な贈り物という名目で渡されました」。

「ウィスラー氏は、構図と全体の調和だけを残して、レディー・エデンの肖像の代わりに、別のモデルの肖像を描いて、この絵を完全に描き直しました」。

「ウィスラー氏が弁護士に与えた指示の中で、レディー・エデンの頭部がその絵の唯一の部分であると述べられたのは、転記写の誤りでありました」。

ウィリアム・エデン卿の最終弁論については、皆さん、私はもう一度、あなた方と一緒に検討しなければなりません。さらに1895年3月6日には、これらの修正が行われました。

原告エデン卿は、この絵をチェックして、自分の所有物であることを正式に認めました。ただ、顔の色調だけでなく、すべての付属品、家具、装飾品、レディー・エデンが座っていたときに着ていたドレスさえも、確認して、さらに、原告エデン卿は、唯一の変更点が、顔立ちの修正と右側に花を挿入したことであることを明らかにしました。

「エデン卿がその絵を注文して代金を支払ったことにより、ウィリアム・エデン卿の所有物となった絵であることに間違いありません」。

「そして、仮に、裁判所が、別の顔に置き換えられたことを、原告のその絵に対する所有権の取消しと考えるならば、裁判所には、画布の破棄を命じ、代金の返還と損害賠償に関して、原告勝訴の評決を下すことには合理的な根拠があるでしょう」。

皆さん。これは、我々が裁判所に出廷したときの状況であり、裁判所が判断を下した時に、私は、榮譽にも、それをあなた方に読み聞かせました。

この判決は、私が裁判所に提出した事実をほぼ正確に再現しています。この判決は、以下のような声明を承認しています。つまり、ウィリアム卿が、この件で主導権を握ったということ、ムーアによって紹介されたので、ウィリアム卿は、ウィスラー氏を彼のアトリエに訪問し、そして、ウィスラー氏によって言及された価格の引き下げを要求したこと。そして、ウィスラー氏は、ムーアとウィリアム・エデン卿によって提案された価格に喜んで同意したことです。さらに、判決は、ウィリアム卿が最大値と最小値の問題について判断する権利を自分に与えたことも認めています。

皆さん、バレンタインデーに、ウィスラー氏に小切手が送られたことを覚えているでしょう。ウィスラー氏がどのような状況で、どのような皮肉を込めてこのバレンタインのプレゼントを受け取ったかを覚えているでしょう。判決では、彼が「小切手を現金化した」と述べられています。彼が実際に行ったことは、小切手を自分の銀行口座に振り込んだようです。

さらに判決文には（ここは完全には正確ではないのですが）、レディー・エデンとウィスラー氏との関係は完全に友好的なものであり続けたということです。しかし、これは、全く真実ではありません。事実、彼らの間には、何の関係もなく、ウィスラー氏はそれ以来、自分のクライアント（エデン卿）にも、自分が描くはずだった魅力的なモデル（レディー・エデン）にも会っていないとっています。確かにウィスラー氏はその絵を描き続けたが、当初期待されていたモデルからの助けは得られませんでした。

裁判所は、その肖像画の展示は、少なくとも暗黙のうちにウィリアム・エデン卿によって承認されていたと考えていました。しかし、皆さん、その中でウィスラー氏がウィリアム卿に自分の「素晴らしさ」に祝福をしたように、私が描いた場面の

直後に、この種の承認のための機会が全くなかったことは理解されるでしょう。ウィリアム卿は、インドに向けて出発し、その後、展覧会が終わって、しばらくしてから、実際には11月にウィリアム卿は帰国して、それは、ウィリアム卿がこの絵の引き渡しを要求した時です。私はこれで本件の事実を立証しましたが、次は、我々は、それらが法律上の審理によってどのように影響を受けるかを確認できるものと思っています。

皆さん、本件の法的側面は、第1審の裁判官らによって宣言されています。裁判官らは、私の依頼人に対して、3つの訴因について判決を下しました。つまり、裁判官らは、肖像画が、未だにウィリアム・エデン卿の所有物であると宣言して、ウィスラー氏にその肖像画を引き渡すように命令し、その肖像画に対して支払われた代金100ギニーの返還と、1,000フラン(40ポンド)の損害賠償とその利息の支払いをウィスラー氏に命じました。

これは、私の依頼人も、私をはじめ、多くの人々は過剰と考えています。ウィリアム・エデン卿に、その成果物自体とその成果物のために支払った代金の両方を与え、さらに損害賠償までも支払わせるのは、明らかに過剰です。

皆さんは、本件がセンセーションを巻き起こしたことをご存じでしょう。この判決は、当然のことながら、ここフランスでも、イギリスでも、大きな議論を呼びました。私は、コメントしたいことが多くありますが、何も付け足しません。世間が何を言おうと、何を書こうと、あなた方裁判官が法律を司っています。しかし、あなた方裁判官は、その裁判の翌日に、私の依頼人によってイギリスの新聞に書かれた手紙をあなた方に提出することをお許し下さるでしょう。この手紙の特徴は、事実を要約していること、私が光栄にも、裁判官の皆さんに訴えてきた点を浮き彫りにしていること、さらに、訴訟当事者の個々の人物像を明らかにしていることです。これから私があなた方裁判官に読み聞かせようとしている手紙は、このような状況下で書かれたものです。イギリス人のジャーナリストというよりも、むしろイギリスの法廷弁護士といった方がよいでしょうが、そのような人物が、ポール・モール・ガゼット(Pall Mall Gazette)紙に、第6小法廷の判決に拍手を送り、契約の問題において、芸術家によって主張可能な特殊な特権などは全く存在しないと主張しています。つまり、他の市民と同様に、芸術家も、引き受けた義務に拘束され、芸術家と靴職人は全く同じ条件で働き、靴であれ絵であれ、彼らの製品を適切に提供する

ことに等しく責任を負っているといっています。

ウィスラー氏は、この議論を、ウィスラー氏自身の特有のユーモアの調子で、つまり、非常にウィットに富んだ機転の利いた方法で、極端なまでに推し進めています。宣誓した翻訳者ではないが、ウィスラー氏の親密な友人であり、著名な文学者であるステファン・マラルム (Stephane Mallarme) によってなされたウィスラー氏の手紙のフランス語への翻訳を、私はあなた方に読み上げます。ポール・モール・ガゼットに投稿された Q.C. の理論、つまり、ペンキ屋と靴屋に対する法律は同じであるべきだという見解に異論はありません。Q.C. は、正しいかもしれませんが、しかし、彼は十分に突き詰めていなく、ポイントを逃しています。

ちょっとした一足のスリッパが、友人から、その代金が1ポンド金貨の半分から15シリングの間であるという理解のもとで、彼の甘い言葉で、注文が入ったならば、自分自身の愚かさの中で、そして感謝すべき顧客の承認の目下で判断しなければならない唯一の人物は靴屋です。薄っぺらなスリッパが精巧でダンディなブーツに成長して、最後に脱がれ、1ポンド金貨半分でも15シリングでも、あるいはそのスリッパに対する顧客の感覚によって、その間のいくらかの金額が支払われるでしょう。

そして、この顧客の自然な優しさは、靴屋が請求書を作成することを許す前に、非常に賢い顧客が靴屋の裏をかいて、愛情のこもった「バレンタイン」というずるい形で、靴屋の手には負えないような繊細な仕事をやってもらうように望んで、その顧客がより低い代金を靴屋に押し付けたとしたら、靴屋は、高貴な靴屋として憤慨し、哀れな顧客の注文をチャラにする権利があります。

しかしながら、邪悪で熱狂的な靴屋がそのトリックを見破り、恩知らずのペテン師を公に晒したいと思った場合は、靴屋は一時的にですが、「バレンタイン」を受け入れ、その後、保安官や弁護士によって要求されたブーツが、靴屋は、1ポンド金貨の半分を送り返し、そしてブーツを手放すことを拒否して、効果的に以下のようにいでしょう。「ブーツのために私を訴えて下さい」。公開の法廷に来て、ブーツを主張して下さい。人々のところに来て、この可愛い物語を話して下さい。世界の人々や私の仲間の靴屋たちに警告するために話してやって下さい。そして、あなたは、その後、そのブーツの中で、素足で、足底がガサガサになるでしょう。あなたの方が私によってブーツを履かせられるよりも早く、私はブーツの上部を剥ぎ取るか、

あるいは、別の人にブーツを履かせるでしょう。

「みなさん、なぜなら」、私は、質問に準備をして、「なぜ、絵を届けるつもりがないのに、小切手を受け取ったのか」。

「彼が来て、パリのみんなの前でそう言うってくれるように」。

「さて、これはすでに起こったことです」。彼の物語は語られました。そして、その哀れな鳴き声は、私の同僚の耳の中に、その匂いは同僚の鼻孔に残っています。そして、私は、巧みに入り込む素人が、再び、急いで、国内か海外でのアトリエで画架からスケッチとして謙虚に騙されている絵をすべて、フックを外すかどうかは疑わしいです。

敬具、ウイスラー、パリ

皆さん、この手紙を読めば、ウイスラー氏がどのような感情を抱いていたのか、疑問は晴れます。ウイスラー氏は、バレンタインの策略を、別の策略で誤魔化そうとしていたのです。ウイスラー氏は「あなたは、私にバレンタインを差し出し、私はあなたのバレンタインを受けとります」と言いました。ポール・モール・ガゼット誌へのウイスラー氏の手紙の中で、ウイスラー氏は、育ちの悪い人間、どちらかという気毒な紳士と見なしていた人間に対する振舞いについての教訓を読むつもりであったということは、明らかです。ウイスラー氏は、エデン卿が、セヌ民事裁判所によって論されるのを見たいと思っていました。ウイスラー氏は正しかったのか、それとも間違っていたのか。ウイスラー氏は、疑いなく、法裁判所では、これらの点を裁くことができないと誤解されていました。裁判所は、あるいは、少なくともフランスの裁判所は、ある人が微妙に、あるいは、無作法に行動したのかどうかということを求めません。つまり、裁判所は、法律問題あるいは事実問題を判断します。しかし、それでも、私は、アーティストとその依頼人のそれぞれの行動を比較していただきたいのです。皆さん、あなた方が損害賠償の問題を審理しなければならない時に、このことを心に留めておいてください。あなた方は、ウィリアム・エデン卿が、ウイスラー氏のアトリエで、どのように入り込んだのかを、ウィリアム卿自身がどのようにして自分が支払うべき価格を決めたのかを覚えているでしょう。あなた方は、ウイスラー氏がこの肖像画を製作した時の注意点を覚えてい

るでしょう。そして、最後に、どのようにして破局を迎えたかも覚えているでしょう。

私は、今、あなた方にお伝えした事実から生じる法的な問題について、皆さんにご説明します。裁判所はウイスラー氏に対し、肖像画の代金の返還と、肖像画そのものの引き渡しと1,000フラン(40ポンド)の損害賠償を命じました。

しかし、事実として、ウイスラー氏は原告から何を借りているのでしょうか。1つだけ確かにウイスラー氏が借りているものは、我々が最初から認めているように、絵のために支払った100ギニーです。ご存知のように、これは、ウイスラー氏が最初に返却を申し出たもので、常にウィリアム・エデン卿が自由に使えるようになっています。しかし、お金そのものは実際には提供されなかったにもかかわらず、私の依頼人は、この訴状に基づいて、損害賠償とその利息を支払う義務があります。裁判所が認めたように、私もこの事実を認めます。しかし、裁判所が我々に、その金銭の返還を命じたのに続き、我々は、裁判所がその肖像画を引き渡すように命じたのには驚かされました。なぜなら、肖像画と金銭の両方に対するウィリアム・エデン卿の主張をどのように両立させるのかは、難しいからです

私の訴訟相手方は、裁判所が判決を下す際に、最初の争点につき損害賠償の賠償額を決めた主張しています。確かに、原告の主張の1つは、ウイスラー氏が、第1の争点につきウィリアム・エデン卿に対して、2,625フランの損害賠償とその利息の支払いを命じられたものであると、私は理解しています。

しかし、ウィリアム・エデン卿にとっては、残念ながら、このような考え方を裁判所が長く持っていたとは思えません。というのも、まとめに目を向けると、この主張が放棄されているだけでなく、反対の主張が提出されていることも理解されるからです。

要約すると、要するに、我々は次のように理解しています。つまり、「ウイスラー氏は、第1に肖像画を放棄すること。第2に2,625フランをエデン卿から支払われた日から5%の利息をつけて返還することを命じられました」。そして、第3の争点として、「ウイスラー氏は、エデン卿に1,000フランの損害賠償とその利息の合計を支払うように命じられました」。本件では、我々には、利息付きの現実の損害賠償があります。その損害賠償は、明確に指定されており、確かに、この1,000フランに限定されています。2,625フランは、全体としても、全く別の問題であり、それは、

エデン卿によってその絵のために支払われた代金の払戻しとして説明されていますが、それには、エデン卿の支払日から5パーセントの利息も付いています。

皆さん、これがまさにその正確な事実関係です。したがって、私としては、裁判所には、この点で答弁書ではなく、最終の弁論であることを確認していただきたいと思えます。

仮に、この第1判決が、裁判所によって確認されたならば、思うに、我々が、ウィリアム・エデン卿に本件の絵を現状のまま引き渡すことを命じるという第2の判決が出てきた時には、それを実現することは困難であると考えています。私はすでに言ったことを繰り返すことができるのですが、ウィリアム卿が、一方では絵の代金を返済させ、他方ではその絵そのものを引き渡せと請求できると考えているようですが、どのように理解してもそれは難しいと思えます。

ウィリアム卿がこの肖像画を持つべきでないもう1つの理由は、もはや、それは、エデン卿の妻の肖像画ではないということです。このことは判決自体が認めています。我々が、第3の争点を取り上げると、裁判所は次のように言います。「ウィリアム・エデン卿が、本来、手に入れるべきものは、自分の妻の肖像画ですが、もはや自分の妻の肖像画を手に入れることができないことを考慮して、損害賠償を認めるものである」といいます。

さて、実際にはどのような契約だったのでしょうか。契約は、ウイスラー氏が何かの肖像画を描くことではなく、レディー・エデンの肖像画を描くことでした。レディー・エデンの肖像画がもはや存在しない以上、別の肖像画やスケッチをウィリアム・エデン卿に引き渡す理由はないでしょう。

皆さん、この絵を引き渡してはならない第3の理由があります。この作品に対して、第三者の誰かが権利を持っていることがあるかも知れないが、その第三者の最終的な権利については、ひとまず置いておくことにしましょう。今ある絵は、完成していません。それは単なるスケッチであり、デザインです。誰も、芸術家に未完成の作品を手放すように強制することはできません。芸術家の心と頭脳の中の不完全な創作物を世の中に流通させることもできません。

皆さん、現在、我々はブラウンとゴールドの調和という準備をしていますが、最終的には何かはその調和した色合いを支配することになります。それは新しい顔ですが、まだ誕生ではなく、構想の段階です。それ故、下級審の判決に従うことも、

ウィリアム・エデン卿を満足させることも、絶対に不可能なのです。

では、裁判所がウィリアム・エデン卿に対して、絵の代金の返済だけでなく、エデン卿自身も証明するように、もはや自分の妻の肖像ではなく、他の人物の肖像であり、いずれにしても未完成の作品である絵を引き渡させるに至った理由は何だったのでしょうか。裁判所は、ある種の法的考慮、つまり、私の意見では、法律に対する誤った解釈や、我々が現在関わっている問題に、販売法の中の特定の条項を適用することによって、影響を受けた結果であると思います。

裁判所は、「ウイスラー氏が小切手を受け取った時点、つまり、2月14日か15日から、ウイスラー氏と原告の間には、引き渡されるべき商品の代金に関する正式な合意が存在した」との見解でした。皆さん、ここから、もちろん、法典の次の条文を思い出してください。

「売買では、目的物は未だに引き渡されていなくても、代金が未だに支払われていなくても、目的物とその代金が合意されるとその時点で、契約当事者間で成立しています」。

本件では、代金は支払われたが、目的物は引き渡されていなかった。

したがって、本件の場合、フランス民法典1583条が裁判所によって適用されました。このことは、判決文を読めば、そして何よりも、裁判所によって採用された論文を執筆した共和国検察官代理であるレナル (Lenard) の注目すべき独創的な嘆願書を読めば、皆さんにもすぐにおわかりになるでしょう。このような特殊な契約観に基づき、レナルはさらにフランス民法点1601条を引用して、次のように述べています。

「売買時に契約対象物が全て破壊されていた場合には、その売買は取り消されます。契約対象物が部分的にしか破壊されていなかった場合、買主には購入を拒否するか、あるいは、その評価をさせた後に、契約対象物の残った部分を要求するという選択肢があることになります」。

皆さん、これが、レナルによって主張されたポイントでした。裁判所が採用した理論は次の通りです。つまり、「ウイスラー氏がバレンタインの受領を認める手紙を書いた日に、財産権の移転があった」というものです。この時点まで、その芸術家に帰属していた作品は、売買法によりウィリアム・エデンの財産の一部となりました。エデン卿の所有権は変更されていません。なぜなら、エデン卿の契約の目的

物は、完全には破壊されていたわけではなく、それは、部分的に破壊されたに過ぎなく、画布、全体的な調和、構想は未だに存在するからです。裁判所は、この絵の全体および一部がウィリアム・エデン卿のものであると宣言しています。

我々が、本件で売買法の適用を認めたとしても、我々には、未だにいくつかの異論があります。買主と売主の間には、対象物とその代金についての合意があったのでしょうか。それは非常に疑問です。2月14日の時点では、対象物ははっきりしていませんでした。あなた方は、絵がまだ完成していなかったことを知っています。ウイスラー氏の手紙で、ウイスラー氏は「レディー・エデンの助けを借りて、この作品を完成させたい」と書いていたことを思い出して下さい。この時、この芸術家は、まだ自分の最後の言葉を言っていないし、最後の仕上げもしていません。代金に関しては、ウィリアム・エデン卿が決めました、ウイスラー氏が決めたわけではありません。裁判所は、私も知っていますが、この手紙全体を皮肉なものとして受け入れることができませんでした。しかし、それは明らかに、ある種の留保を意味します。「私はあなたのバレンタインを受け入れます (I accept your valentine)」という言葉の繰り返しには、確かに意味があります。あなたは本当に素晴らしく、すべての面で得点しています」には確かに意味がありました。この後の展開を見ると、ウイスラー氏は心の中である種の疑念を抱いていたことがよくわかります。ご存知のように、ウイスラー氏の計画は、その絵を保持し、ウィリアム・エデン卿にその絵を公に主張させ、エデン卿を混乱させることでした。対象物や代金についても、全く合意がありませんでした。たとえ、本件がフランス民法典1583条の意味に該当することを認めたとしても、我々は、買主と売主の間に必要な合意が存在したと認めることはできません。

また、皆さんもご存知のように、芸術家が自分の作品を手放すことなく、芸術作品の譲渡は芸術家の正式な同意がない限り行われえないということは、誰もが認める事実です。芸術家は、その創作者であると理解すると、要素的な観点からは自分の作品の支配者になります。芸術家は、自分の作品の所有者です。芸術家は、最後の瞬間まで、つまり、自分自身が完全に満足する時まで、自分の作品の支配者であり、所有者であり続けます。ウイスラー氏には、自分の財産をウィリアム・エデンに譲渡する意思があると思わせるような行動はありませんでした。

皆さん、これらの原則は、しっかりと確立されています。あなた方の許可が得ら

れば、プイエ (Pouillet) の「文学および芸術的所有権の法律 (the Law of Literary and Artistic Property)」に関する著作から2ページを読ませて頂きます (マイトレ・ビュールデリーは、ここで、自分の主張を裏付ける一節を読みました)。

このような原則が、その後、定められています。作品を作った芸術家は、意図的に手放すまで、その所有者です。なぜ、そうなのか。ここで、私は、依頼人の許可を得て、彼と異なることをしなければなりません。我々は、合意が履行されなかった場合に、為す義務を損害賠償に変化させることに関心があるだけでなく、私の依頼人がどう考えていようと、芸術家と靴屋には差異があります。そして、芸術や文学の分野では、遵守されなければならない特殊なルールがあります。

ここでもまた、皆さん、この法は、先例によって我々のために否定されてきました。芸術家が芸術作品の注文を受ける際のその契約の性質とは何かということが、問われています。それは売買なのか、作品を雇用で創作する合意なのか、それとも注文なのか。それは、スイ・ジェネリス (sui generis) 契約であることが確立されています。この点について、オーブリー (Aubry) とオウ (Eau) の言葉を引用します (本件で、裁判長は、「ポイントは明確に確立されているので、その必要はない」と発言しました)。

我々が、これから、考慮しなければならないことは、為す義務です。我々は、その絵が、特定の瞬間に完成したかのように見えるかも知れないが、ウイスラー氏がその絵の所有者であり続けたと考えてよいでしょう。ウイスラー氏は、その絵を展示はしたものの、本件原告に譲渡したことはなく、その絵を所有し続けていました。我々は、何度か、不完全な作品や、署名のない作品、そして、未完成でさえも、ウイスラー氏の絵として展示されたという事実を集めたので、この展覧会は、実際には、実験であり、一種のリハーサルでした。

ウイスラー氏がこの絵の所有者であり続けたことは明らかです。したがって、ウイスラー氏が、誰かの財産を破壊したとしても、それは自分の所有物でした。ウィリアム・エデン卿が、その目的に近づけば近づくほど、つまり、その作品の取得に近づけば近づくほど、あるいは、その作品がある時点で彼のために意図されていたことが明らかになればなるほど、彼には、正当な損害賠償を求めることができますが、それにもかかわらず、あなた方は、これらの損害賠償を超えて何も請求することができないことは明らかです。皆さん、ウイスラー氏は、この絵を修正しました。そ

の絵は、もはやレディー・エデンの肖像ではありません。しかし、裁判所は1つの点で、気が咎めているのかも知れませんが、私はそれを急いで解消します。仮に、この絵が、レディー・エデンの肖像であるならば、裁判所は、彼女の夫がそれを要求するのは正当であると考えたかも知れませんが、裁判所は、いずれにしても、画布の破壊に対するエデン卿のもとの訴えが合理的な訴えであると考えているかも知れません。我々は芸術家のところに行き、芸術家に、自分たちにとって大切な人物の特徴を再現するように依頼します。芸術家は、金銭的な問題（ただし、本件はそうではない）のためか、あるいは評価の問題（これがウィスラー氏とエデン卿の間の断絶につながったと思われる）からか、我々が注文した物を引き渡すことを拒否しています。我々が再製するように依頼した愛する人物の形見を、芸術家が自分自身の財産として、保持する何らかの権利があるということを許すことができないでしょう。流石にアイデアには驚かされます。一定の事情があれば、作品の破棄を要求することは不合理ではないでしょう。しかし、不完全な作品の引渡しを要求することは非常に不合理でしょう。皆さん、この絵が、どこまでレディー・エデンの肖像と呼べるかを判断できるようになります。それは特定の人の肖像ではなく、もはやレディー・エデンの肖像でもなく、まだミセス・ヘイルの肖像でもありません。

マイトレ・ブロー (Maitre Bureau)：しかし、ミセス・ヘイルの夫は、それは妻の肖像画であると主張しています。

マイトレ・ビュールデリー：私がそれを今これから説明します。できる限り体系的に説明させてください。私は、様々な異論を受け止め、それらを順に処理しなければなりません。この肖像画を見れば、特別な人の肖像画ではないことがわかると思います。先ほども言ったように、まだ決まっていない個性を持つ何かを創作しなければなりません。その特徴が描かれているのは、彼女、つまり、レディー・エデンであったので、その絵はレディー・エデンの個性であったはずですが、しかし、それはもはやレディー・エデンの肖像ではありません。他方、それは、まだヘイル夫人の肖像画でもありません。

レディー・エデンに関する限り、その肖像画は存在しなくなりました。この言葉にどのような証拠を出すことができますか。まず第一に、我々には、下級裁判所の宣言があります。つまり、ウィリアム・エデン卿は、レディー・エデンの肖像画を手に入れることができないので、我々はエデン卿に損害賠償を認めなければなら

せん。私の訴訟相手方は、肖像画に変更が加えられていることを認めています。つまり、確かに顔は完全に変更されていますし、アンサンブルも絵の左側に花を入れることで変更されています。我々は、原画が実際に抹消され、全体的な構図だけが残されていると主張しています。レディー・エデンのポーズが残っているのは事実ですが、頭と手はもはや同一ではなく、ドレスも新しい創作コンセプトに合わせて適合されています。

確かに、皆さん、私が言うことをお許し頂ければ、ウイスラー氏のような誠実な芸術家であり、調和の達人は、肖像画全体を修正しなくては、モデルの個性を変えることはできないでしょう。ウイスラー氏は、別人のためにデザインされた舞台や設定の中に、新しい顔を挿入することはできませんでした。

ウイスラー氏自身は何と言っていますか。「私は、大体の手順はそのままにしております」と。一般的なアレンジは、画家自身の創作物であり、肖像画とはいくらか別物です。一般的なアレンジは、画家に対するあなた方の依頼とは全く関係がありません。この構成、調和、付属品の配置は、画家のものであり、画家がそのように望めば、そのアレンジも別の物に適用できるように形作られます。

皆さん、これが、私の訴訟相手方の意見に対する私の答えです。裁判所は何の躊躇もする必要はありません。ウイスラー氏が保持しているものは、レディー・エデンや、その夫の単なる感受性を決して傷つけるものではありません。レディー・エデンの肖像画としての絵はもう消えてしまいました。

しかし、皆さん、訴訟相手方が、ここで、私に反撃を仕掛けてきます。

我々の訴訟相手方は、「ヘイル夫人が、第1審ではその絵を自分のものと主張していましたが、もはやそのような主張はしていません」と言っています。私としては、恐らく、ヘイル夫人がもはや法廷に登場しないのはなぜかと尋ねられるでしょう。

事は極めて単純です。ウイスラー氏は、下級審の判決にもかかわらず、自分がこの絵の正当な所有者であると考えていたので、もともとレディー・エデンのために作成した構図を別の人の頭部に変えました。この頭部は現在、受胎期にあります。ヘイル夫人は、ウイスラー氏が自分に与えると約束（芸術家側の別な優雅な譲歩）してくれた本作品をどうしても手に入れたいと思い、夫を通じて第1回目聴聞に参加しましたが、ヘイル夫人の訴えは、その参加が不当に遅れたという理由で却下されてしまいました。ヘイル夫人の夫はもう参加していませんが、それはなぜか。なぜ

なら、もう長い時間が経過しているためです。今、ウソがアメリカに流布しているためです。そして、肖像画を手に入れることを諦めているからです。裁判所の判決により、ウイスラー氏がその絵につき彼の仕事を続けることが禁止されたので、ヘイル夫人の夫は、この物に対する興味を失い、我々の前に姿を現さなくなりました。ヘレン夫人の夫は、実際には、むしろ我々には反対の立場で登場することになるでしょう。その場合、私はウィリアム・エデン卿に申し上げるのと同じように、「あなたには、この絵の権利はありません。なぜなら、それはまだ完成していないからですというでしょう」。その絵は、未だに私の財産です。この作品が未完成である限り、また、私がこの作品は完成し、かつ完璧であると考えていることを認めるのに等しいような自発的な行為によって、あなたに引き渡せば別ですが、そうでない限り、あなたにも、この作品に対して何の請求権もありません。この作品は、まだ私の財産の一部であり、もし私が、自らのリスクと危険を冒して構図を変更したり、姿やアクセサリーを修正しようとするならば、私は、自由にそうしなければなりません」。このような状況です。別の観点から言えば、あなたは、ウイスラー氏に対して、未完成の作品あるいは未完成のアイデアを引き渡すことはできないということであれば、私にはこれ以上、付け加えることはありません。ウイスラー氏は、意図的な行動により、レディー・エデンとの契約を実行できないようにしました。したがって、ウイスラー氏は、損害賠償を支払わなければなりません。それは、純粋に損害賠償の問題です。これは、フランス民法 1142 条に規定されています。私が読むことをお許しください。フランス民法 1142 条には、この問題の根幹が含まれています。「売主の側に為すべきことがある場合、為す義務、あるいは為す必要のない債務も全て、損害賠償の裁定によって解決される」。また、Dalloz 社の注釈付き民法では、さらに次のように書かれています。「債務不履行をおかした者の行為によって履行が不可能になった場合、損害賠償以外の刑罰を求めることはできない」。また、我々は、一般法律学 (La Jurisprudence Generals) の 713 番にある「義務 (Obligation)」という見出しも参照しました。皆さん、この点については、疑いの余地はありません。したがって、我々が考える必要があるのは、損害賠償の問題だけです。セース民事裁判所は、ウイスラー氏に 1,000 フランの損害賠償とその利息の支払いを命じました。皆さんは、ご自身で結論を出すこととなりますが、私は、裁判所がこの裁定を正当化するのには難しかったのではないかと考えています。我々の訴訟相

手方は、レディー・エデンが受難したトラブル、ウイスラー氏のような気難しく、細かいことに煩く、厳格な芸術家の前にモデルとしてじっと座っていることによる疲労や不快さをいかばくかであったかを訴えました。しかし、裁判所はこの主張を無視し、「ウイスラー氏は約束したものを提供することができなかつた。ウィリアム・エデン卿は、もはやレディー・エデンの肖像画を手に入れることができないので、損害賠償を受ける権利がある」と述べて、その判決を正当化しました。私は確認していますが、エデン卿は、その絵を受け取ることはできません。しかし、エデン卿には補償があります。つまり、エデン卿は、その肖像画のために投資したお金があります。そして、損害賠償を算定する前に、裁判所は、この問題における後援者エデン卿と依頼者ウイスラー氏のそれぞれの手続きを思い出さなければなりません。私は、詳細に立ち入る必要はありません。なぜなら、ウイスラー氏は、何度か、自分自身と自分のクライアント、つまり、エデン卿との関係をあなた方に詳細に話したからです。しかし、ここでも、裁判所はある種の疑念に影響されるかも知れません。本件は、ある家族の父親が、子供たちに母親の肖像画を遺したい、家宝にしたいと願っていたことに由来します。ウィリアム・エデン卿の場合もそれが当てはまるのでしょうか。私は、ノーと言わなければならないのが残念です。皆さん、ご存知のように、私は原則として、訴訟の相手方とのやりとりには関係者を避けています。関係者は、しばしば無関係であり、時には危険です。しかし、これは、あなた方が決定しなければならない損害賠償の問題に直接関係するので、あなた方にお話するのが私の義務です。ウィリアム・エデン卿は芸術パトロンを装っていますが、実際にはアマチュアの絵画ディーラーです。私は、エデン卿が家族のために自分の妻の肖像画を描かせているわけでも、自分の子供たちに残すためという考えでもないことを証明したいと思います。エデン卿の注文は、投機目的です。エデン卿は、自分の妻と子供の肖像画を売りに出し、利益を得ています。私は、訴訟相手方に対して、道徳的な観点から、この関連で圧倒的である一定の文書を引き渡しました。これらの文書の第1として、ブッソド・ヴァラドン(Boussod Valadon)からの手紙があります。その手紙は、会社のロンドン・ハウスから、ウイスラー氏の弁護士であるウェブ氏(Webb)に書かれたものですが、それは、以下のようなものです。

1897年10月8日

拝啓

あなたの手紙への返事に、私は、パリでの訴訟の直後にそれを述べたいと思います。ウィリアム・エデン卿は、ここ数年来、時折、私どものギャラリーを訪れてくださり、我々が展示している絵を何枚もご覧になり、絵をお買いになって支払われて行くのが、ずっと習慣です。エデン卿は、本訴訟のことを話し、そして、私はサロンでレディー・エデンの肖像画を見たことがあると言いました。聞くところによると、ウィリアム卿は、この絵を気に入っていないとのことでしたが、この絵の商業的価値を知っていたので、私は、自分の会社を代表して200ポンドの買値を提示する用意があると伝えました。エデン卿は、この絵にはもっと高い価値があると言って、それを断られました。それではと、私は、買値を250ポンドにしましょうと言いました。エデン卿は、その価格では売るつもりがないと答えました。エデン卿は、私にその絵を提供しませんでした。私は250ポンドと提示しましたが、エデン卿は断ってきました。

ここで、私は2通目の手紙を提出したいと思います。この手紙は、ある有名な会社の経営者に宛てて、ウィリアム・エデン卿自身が書いたものです。

「拝啓、次の土曜日に、スワン氏(Mr. Swan)が描いた私の娘の絵をあなたの画廊に送ります。[スワン氏は著名な画家で、昔、レディー・エデンや、ウィリアム・エデンの幼い娘の肖像画を描いていました]。

私はあなた方に、それを見て頂きたいと思っています。

ご推察の通り、非常に巧妙な作品ですが、肖像画としては、私には満足できません。

恐らく、あなたは私の代わりにそれを処分するかも知れません。あるいは、私の手から取り上げるかも知れません。

敬具 ウィリアム・エデン卿。

この手紙には返事が送られ、その申し出は断られた。しかし、ウィリアム卿は自らが負けたとは思わずに、別の画商に依頼しました。そして、私は、その別の画商の支配人の手紙を、あなた方に読んで聞かせるつもりです。その手紙は、すでに

私が訴訟相手方にも伝えておいた手紙です。

拝啓

3年ほど前、スワン氏が描いたウィリアム・エデン卿の少女の絵がここで販売されてきました。

敬具

私は、ウィリアム・エデン卿にあまり圧力をかけるつもりはなく、そして、これらの文書に基づいて、私が主張するのは次のことだけです。つまり、ウィリアム卿は、ウイスラー氏の手によって、一度は、レディー・エデンの肖像画であったもののわずかな、そして一時的な形跡は残っているので、裁判所に自分の戸惑いを主張することができません。仮に、エデン卿がいうように、確かに、レディー・エデンのドレスの色を認識していたとしても、私があなた方に提出した証拠を、我々が審理する時に、別のモデルの人物には似合う色によって、エデン卿のデリカシーが害されるだろうと信じることは難しい。

皆さん。損害賠償の問題に移ると、あなた方は、ウイスラー氏が要求した価格よりも高い価格が、それに付けられたという事実によって、その作品の価値を判断することができます。あなた方には、ウイスラー氏の芸術作品をウィリアム・エデン卿に手渡すことが不適切であることがお分かりいただけると思います。この作品はすぐに、ロンドンやパリのオークション会場に持ち込まれ、名声や広告の威信をかけて、間違いなく、この裁判所の判決を引用することになりますが、あえて言えば、ウィリアム・エデン卿が期待するようなものではないでしょう。

マイトレ・ブロー (Maitre Bureau) の陳述

「皆さん、ウイスラー氏が皆さんに提訴した理由は、ウィリアム・エデン卿との喧嘩ではありません。ウイスラー氏の弁護士は、本件では、我々にお金は問題ではないと慎重に説明してきました。つまり、ウイスラー氏が裁判所で判断されたいこと願っていること、復讐したいと思っている侮辱は、彼自身を代表した芸術に対して犯された犯罪です。

皆さん、私の側では、そのような崇高な使命を主張することはできません。私は単に、裁判所第6小法廷ですでに宣告され、重要でない小さな事件の問題につき、あなた方の判断を仰ぎたいだけです。ウイスラー氏はレディー・エデンの肖像画を依頼されたのでしょうか。裁判が始める前に、ウイスラー氏は一定の価格に合意したのか。肖像画が完成したとき、あるいは完成間近になったとき、ウイスラー氏はその代金を受け取ったのでしょうか。ウイスラー氏は、その肖像画をレディー・エデンのイニシャルを付けて、シャン・ド・マルスのサロンで展示したのでしょうか。展示が終了した後、ウイスラー氏は、その絵を注文した人物に引き渡すことを拒否しました。そして、その結果、発生した訴訟の途中で、ウイスラー氏は、頭部を塗り潰して肖像画を改変しました。皆さん、私は、これらの事実を、あなた方が納得して頂くために立証することを望んでいます。そして、私が立証したときには、あなた方が、下級審裁判所の判決を支持することは正当であると考えられることに疑いを持っていません。

我々は、まず、この肖像画の注文を受けたでしょう。ウィリアム・エデン卿が最初にウイスラー氏にレディー・エデンの肖像画を依頼しようと考えたのは、正しくは1892年のことです。この関係で、一定の手紙が読み上げられましたが、それらは、ウィリアム・エデン卿とトムソン(Thomson)のとの間で交わされたものです。トムソンはウィリアム卿とウイスラー氏の仲介役を務め、トムソンはその芸術家にレディー・エデンの肖像画を描くかどうか、そしてウイスラー氏に料金を尋ねました。ウイスラー氏は、ご存知のように500ポンドと答えました。あなた方は、ウィリアム・エデン卿が「いや、それでは高過ぎる」と反論したこともご存知でしょう。私は、今年、すでにスワン氏に自分の妻を描いてもらっているのです、同じものを描いて貰うのに、そんな大金は出す余裕はありません。ウイスラー氏の住所を教えてください。仮に、後日、私がウイスラー氏に会う機会があれば、我々はもしかしたら折り合いをつけられるかもしれません。

ウイスラー氏とウィリアム・エデン卿が、共通の友人であるジョージ・ムーア(George Moore)によって引き合わされたのは、それから1年半後の1893年末のことでした。

皆さん、ご存知のように、その手紙は、1894年1月6日に書かれました。その手紙は、この芸術家とこのアマチュアの間でどのような条件で合意されたかが書かれ

ています。

座り方のために配置がなされました。レディー・エデンはウイスラー氏のアトリエに来て、何度かモデルになりました。1894年2月14日には、その絵はほぼ完成しました。この日は、ご存知の通り、聖バレンタインの祝日で、イギリスでは小さなプレゼントを交換する習慣があります。

それに合わせて、2月14日

ウィリアム・エデン卿は、封筒に入った小切手と次のような手紙をウイスラー氏に手渡ししました。

4, Rue de Presbourg, Paris,

1894年2月14日

親愛なるウイスラーさん

ここに、100ギニーのバレンタイン小切手をお届けします。この絵は私にとって計り知れない価値があり、家宝としていつまでも受け継がれていくことでしょう。

私はいつもこの絵を喜んで鑑賞し、感謝の気持ちも残るはずです。

敬具

ウィリアム・エデン

同日、ウイスラー氏は、次のような言葉でバレンタインのプレゼントの受領を認めました。

110, Rue du Bac, Paris,

2月14日

親愛なるウィリアム卿

私は、あなたのバレンタイン・プレゼントを受領しました。

あなたは本当に素晴らしいです。そして、すべての面で得点を獲得します。

私は、この小さな絵が私たち全員にとって少しでも価値のあるものであることを願っています。そして、レディー・エデンの優しい約束を信じて、私たちが知っている最後の仕上げをさせていただきます。

レディー・エデンには自分の役割を果たすために、大変勇気があり、優しさもありました。

あなたの旅の成功を祈っています。

敬具

J. マクニール・ウイスラー

この手紙は完全に皮肉を込めたものだと言われています。「あなたは本当に素晴らしい」などなど。さらに、ウイスラー氏の皮肉は、我々の言語に翻訳されるべきではないと言われています。私が最初の裁判所で使った翻訳は、非常に不正確だったと言われていますが、翻訳の言葉が正確ではないとしても、ウイスラー氏の考えや意図が伝えられていることは認められています。しかし、この手紙が他の手紙のように、ステファン・マラメ (Stephane Mallarme) によって翻訳されていなかったことを、私はとても残念に思っています。この時の皮肉な手紙の意味とは、いったい何であったのでしょうか。我々は、この説明で本当に納得できるのでしょうか。「あなたは本当に素晴らしい！」というフレーズには、疑いもなく、風刺が込められています。しかし、この手紙の残りの部分は大変に友好的で、作品の完成を約束しており、最後の仕上げがいくつか残っているだけですと述べ、レディー・エデンの親切さや忍耐に敬意を表しています。署名の直前の文章も友好的です。

翌日、この芸術家とウィリアム・エデン卿との間で話し合いがありました。この対話については、2つの記録が残されています。第1の記録は、印刷されている私の博学の友人のスピーチに含まれています。彼は親切で、私にコピーを送ってくれました。しかし、我々は、第1審裁判で裁判官へ提出したその争点を比較するために別の貴重な記録も持っています。これは、裁判後にウイスラー氏自身が署名した「インタビュー」です。ご覧になってすぐお分かりになるように、文章には若干の相違があります。これは、私の博学の友人が提出した版です。

「この芸術家は、高貴な依頼人をアトリエのドアで応対して、アトリエの中に入るようには言わなかった。2人の間には次のような会話がありました。『あなたから理解できない手紙を受け取りました。非常に失礼な手紙です』と。「ありえないことです。私は決してそんなことは書いていません」。「でも、『あなたのバレンタインを受け取りました』というのはどういう意味でしょうか。「あなたは、バレンタインを

私に送りました。私はそれを丁寧に認めます。「しかし、あなたは、『あなたは、本当に素晴らしい』といます。「そうではないと言いたいのでしょうか。「私はあなたの手紙は侮辱的だと思います」。

ここでウィリアム・エデン卿は、合意された高値の150ギニーと安値100ギニーについて主張し始めた。最後に「人は、より安く手に入ることができるのに、それ以上払うのは馬鹿馬鹿しい」と言いました。

皆さん。もし、ウィリアム・エデン卿が、本当にこのようなことを言ったとしたら、どれほど滑稽に映ることでしょうか。これは、第1審の法廷で提出された記録です。

それでは、ウイスラー氏自身の記録を見てみましょう。第1審の裁判後、「ウイスラー氏は、前述のように、インタビューを受けました。ウイスラー氏の謙虚さは、インタビューをした人によっても、警戒されていません。その結果、フィガロ紙に長文の非常によくできた記事が掲載されました。皆さん。ウイスラー氏の肖像画の紹介は割愛します。

「昨日、ウイスラー氏に会ったとき、彼はこの奇妙で滑稽な話を詳しく説明してくれました。この話から、誰とは申しませんが、その人はある種の嘲笑を受けることは避けられないかも……」。

そして、あなた方もすでに聞いたことがある話が続きます。ウイスラー氏は、最初の考えではスケッチを描くだけのつもりでしたが、実際に肖像画を描いてみると、当初の予定よりもかなり進んでしまったと説明しています。これを聞いてください。「私は自分の絵に夢中になってしまいました。これは、ご存知のように、芸術家にとっては珍しいことではありません」。裁判では、ウィリアム・エデン卿が値切ったといわれました。それどころか、新聞では、ウィリアム卿が高貴な人物のように振る舞っていたとウイスラー氏の証言もあると書かれていました。ウイスラー氏は、曖昧な手紙を受け取ったので、その後説明を求めました。この芸術家の苛立ちの原因が価格に対する不満であろうことを察知したウィリアム卿は、どのように行動したのでしょうか。「私の小切手を返してくれれば、私は、あなたに150ギニーの小切手を送ります」。私たちが言われているように、ウイスラー氏がどのような残忍さをもって、あるいは、どのようなユーモアをもって返答したかは、ご存知の通りです。

しかしながら、それはともかく、ひとつだけ立証されたことがあります。第1審での証言にもかかわらず、ウィスラー氏の手紙やインタビューを読んだ後に、ウィスラー氏が実際にそのお金を受け取ったのかどうかについて、疑問を感じたのかも知れません。ウィスラー氏は、新聞への手紙の中で、大胆にも「その小切手を使ったことはない」と述べていました。さて、真実はこうでした。その小切手は1894年2月14日に彼に渡されました。翌日には現金化されました。問題となっている金額は全く返却されず、私の依頼人にも全く通知されませんでした。私の博学の友人は、そのお金が我々の手に渡ったと確認しています。私は法的な申し出を主張しているわけではありません。なぜなら、ウィスラー氏が法律の複雑さを理解することは期待できないからです。しかし、実際のところ、ウィスラー氏は100ギニーを返済しようとはしませんでした。ウィスラー氏が最終的にロンドンの弁護士に指示して、我々にお金を提供したことは事実です。しかし、何時ですか。1894年11月9日です。

メイトレ・ビュールデリー (Maitre Beurdeley)： 召喚状が出された翌日。

メイトレ・ビュロー (Maitre Bureau)： 支払いの10ヶ月後。

2月14日のこのシーンの後に何が起こったのですか。ウィスラー氏は、肖像画にいくつかの仕上げをしたいという願っていました。ウィスラー氏は、それが終わったとは思っていなかった。そこで、レディー・エデンは、1894年3月30日、次のような内容の手紙を芸術家に送っています。

親愛なるウィスラーさん

私は、モデルとして最後に座るのは、何時でしょうか。月曜日以降であれば、いつでも結構です。私は住所を変更しました。ご確認下さい。

これは、前に喧嘩をしたことのある人々の関係でしょうか。

メイトレ・ビュールデリー： その手紙に対する答えはありませんよね。

メイトレ・ブロー： いいえ、レディー・エデンはアトリエに行きました。最後のモデル役は……。

メイトレ・ビュールデリー： いいえ。

メイトレ・ブロー：あなた方は、この発言に異議を唱えるのですか。この絵はウィスラー氏が、シャン・ド・マルスのサロンに送ったもので、1187番で「ブラウンとゴールド」として展示されました。「ブラウンとゴールド。E夫人の肖像」。この作品は、「紫と銀」、「紺と銀」、「青と紫」と名付けられた同種の印象作品とともに展示されました。

我々は、この肖像画が、私たちの同意を得て展示されたと言いましたが、ウィスラー氏はそれを否定します。しかし、少なくとも我々の暗黙の同意があったのです。

ウィスラー氏は、法理論に大変よく精通していますが、ある女性の肖像画を描いた芸術家が、その女性とその夫の同意なしに、その肖像画を展示する権利があると主張するほどの大胆さは持ち合わせていないだろうと思います。皆さん。とにかく、この事実は明確に証明されています。ウィスラー氏は、この絵を展示しました。あのサロンは、閉鎖されました。1894年10月10日、ウィスラー氏にその絵を自分の家に送るように促す手紙が届きました。返事は受け取っていません。そこで、2通目の手紙が書かれました。再び、何の返事もありませんでした。それから、ロンドンにいたウィリアム・エデン卿は、弁護士のところに行き、この件について説明しました。私がお金を出して買った肖像画は、すでに完成して展示されているのに、私はそれを家に送ってもらうことができないと。

手続きを開始する前に、エデン卿の弁護士は、ウィスラー氏に丁寧な言葉で手紙を書きました。

返事はありませんでした。ロンドンの弁護士は、パリの代理人であるスウェル(Sewell)とヴォーン(Vaughan)に手紙を出し、ヴォーンはウィスラー氏に非常に丁寧な手紙を送りました。この彼らは、何か誤解があったのだと確信していました。未だに、返事なし。とはいえ、ある種の返事がありました。手紙が全く来ないので、スウェルとヴォーンは、弁護士を派遣しましたが、ウィスラー氏はそれを快く追い返しました。そして、この訴訟が提起されました。

私の博学の友人は、ウィリアム・エデン卿がこの訴訟の過程でコロコロと態度を変えてきたことを批判しています。我々は、本件の審理のさまざまな段階で誰が責任を負うのかを立証します。

それは、我々がその肖像画の引き渡しを申し出たことから始まりました。当初、我々は、ウィスラー氏が徐々に我々に事情を明らかにしてきたことを知りませんで

した。これは例外的なケースであると反対されました。ウイスラー氏が、独創的であることに違いはないのですが、我々に、訴訟費用の支払担保 (judicatum solvi) を求めました。ウイスラー氏は自分が外国人であることを忘れていました。しかし、ウイスラー氏は、この点を主張しませんでした。

聴聞の前日、我々はウイスラー氏から思いがけない通知を受け取りました。つまり、ウイスラー氏は、レディー・エデンの頭部を描き上げたが、これから、別の人の頭部と交換するつもりであり、さらに、絵の全体的な配置はそのままにするつもりであるという内容でした。

私は、聴聞の前日である 1895 年 2 月 25 日にウイスラー氏が行ったこの肖像画に加えた唯一の修正は頭部を塗り潰したことであり、という趣旨の最初の確認を裁判所には心に留めておいていただきたい。そして、我々が聞かされたことは、ウイスラー氏が著名な画家であり、ウィリアム・エデン卿のウイスラー氏に対する態度は極めて異常であり、そのために肖像画の引き渡しを拒否したという話です。

この新しい状況に直面し、我々が、それまで何も知らなかった肖像画の改変に、我々も必然的に態度を修正しなければなりません。我々は、この肖像画の返還を求めたのは、我々が、芸術家によって肖像画に与えられた最終的な形式、つまり、その芸術家自身が、「小さな傑作」と表現した形式に存在すると信じていたからです。私たちは、新たな訴えを提起し、損害賠償を求めました。我々は、我々の財産が改ざんされたのだから、損害賠償を要求すると言いました。

皆さん。しかし、ウイスラー氏は我々のために、他にもサプライズを用意していました。その事件は、2 月 27 日に起きました。裁判所は、肖像画をオハンプル・デュ・conseil (Ohambre du Conseil) に提出し、両当事者の出頭を命じました。では、我々は、何を見つけたのでしょうか。顔部や頭部が塗りつぶされているだけでなく、レディー・エデンの頭部の代わりに別人の頭部が使われていました。ウィリアム卿とレディー・エデン夫妻は、自分たちが見た絵をレディー・エデンのかつて肖像画であると宣言することに困難は全くないということ覚えておく面白いです。ただひとつ改変されたのは、頭部でした。同じ長椅子があり、アクセサリーも同じでした。長椅子やアクセサリーに、花の鉢が、右側の木陰に追加されました。しかし、ここがもうひとつの重要なポイントですが、ドレスや衣装のさまざまな付属品には手が加えられていませんでした。したがって、改変されたのは、頭

部だけでした。皆さん。明らかに、これらの新しい発覚に直面し、我々は立場を変えなければなりませんでした。我々がそうしても、我々は非難されることはありません。我々は、それから、裁判所に戻りましたが、その時、私があなた方に注意をお願いしなければならない別の出来事が発生しました。その絵は、ガラスをかぶせて持って来られました。裁判長に対して、私は顔の絵の具の新鮮さを指摘しましたが、裁判長は、ウイスラー氏にガラスを外すように頼みました。ウイスラー氏は、それは非常に難しいと答えました。しかし、それはとても簡単であったことが証明されました。2本の釘が引き抜かれ、ガラスも取り除かれました。裁判長は、それから、ウイスラー氏にハンカチで絵を拭くように頼み、「あなた方はこの絵が古いので、顔の改変は最近行われたものではないと言いますね」と念を押しました。これは、あなた方の最後の訴えであると主張されています。したがって、私の思い通りにしても何の害もありません。

ウイスラー氏は、それに応じて、顔の部分を除いて絵全体を強くこすりました。皆さん、改変は、この絵がシャンブル・デュ・コンシル (Chambre du Conseil) に持ち込まれる直前に行われました。

メイトル・ビュールデリー：あなた方はシャンブル・デュ・コンセイルでは、この点につき私に注意を促しませんでした。

裁判長：我々は、シャンブル・デュ・コンゲイルで起こったことを実際に調査することはできません。

メイトレ・ブロー：しかし、私の博学の友人は、この点につき彼に注意を呼びかけなかったと言います。

裁判長：もしよろしければ、スピーチを引き続きお願いします。メイトルさん。

メイトル・ブロー：確かに、特に私の画集にある新聞が、この避難に答えてくれるでしょう。我々が裁判所に戻ったとき、私はシャンブル・デュ・コンシルで起こったことを公に声明してもらうように気をつけました。

皆さん。以上が、あなた方に提出され、下された判決の根拠となった事実です。訴訟の相手方は本件に何か新しい要素を入れてきましたか。

何もありません。グーピルのマネージャーからの手紙が置かれており、それによると、3年ほど前にウィリアム・エデン卿が、自分の小さな女の子の肖像画を売るつもりがあったことが示されています。手紙にはその理由が書かれています。その

肖像画は、満足のいく似顔絵ではなかったからと。この事件が、今回の訴訟にどのような影響を与えるのでしょうか。

このマネージャーは、さらに、ウィリアム・エデン卿が勝訴の判決後、エデン卿が、ロンドンのゲービル画廊に行き、マネージャー自身とウィリアム卿との間で訴訟の話をしたところ、ゲービルが200ポンドでこの絵を買い取ると言ったことを証言しています。このマネージャーは、250ポンドに増額したと付け加えていますが、確かに、彼は、彼の条件を上げる余裕がありました。なぜですか。ウィリアム・エデン卿は、この絵を売ることは考えていなかったのも、もちろんその申し出を拒否しました。ウィリアム・エデン卿は、言及された額が絵の価値を下回っていると思ったわけではありません。ウィリアム・エデン卿は、自分の妻の肖像画であったものが、多くの記事やインタビューで社会の注目を集めた絵であり、ウイスラー氏が熱心に取り組んでいる広告の媒体となることを許さないということでした。それが、ウィリアム・エデン卿がこの肖像画を手放さなかった理由です。

その上、控訴の通知も届けられました。ウィリアム・エデン卿が、ゲービルと交渉していたら、彼の立場はどうなっていたのでしょうか。しかしながら、これは重要ではありません。我々が対処しなければならないのは、下級裁判所が判決を下した永遠の問題です。注文を受けて、それを為したか。これに関連して、私は、博学の友人に回答しなければなりません。その友人は、あなた方が、その絵をウィリアム・エデン卿のものであると裁決できないと主張しています。なぜなら、それは、芸術家の脳の不完全で不完全な創造物であるからです。しかし、皆さん。今さら肖像画がどうなっているのか、尋ねる必要はありません。我々は尋ねなければならないのは、ある瞬間に絵が完成したかどうかということです。確かに、我々がウイスラー氏自身から聞いて知っているように、完成はありました。著作権者はインタビューに対して「傑作」と言ってはばからないほど、著作権者の満足のいく作品に仕上がっていました。

私は、注文を受けた画家が、満足のいかない作品を納品するよう要求することはできないと認めます。しかし、今回のケースでは、ウイスラー氏は完全に満足していました。我々は、その絵は完了し、現実に私の依頼人のイニシャルのもとで、展示されるほどの完成の状態にあると明確に立証されたものと考えています。皆さん。この作品は、我々の財産ですから、我々に引き渡されなければなりません。

我々は、ここで、最初の訴訟にヘイル夫人が巧妙に介入した点を少し考えなければなりません。ヘイル夫人は控訴審には登場していませんが、絵において再度描かれた頭部は、ヘイル夫人の肖像画の予備スケッチであったといわれています。

さて、仮に、この絵がウィリアム・エデン卿の所有物であった場合、どのような結果になるのでしょうか。ウイスラー氏は、作品を完全に、あるいは部分的に破壊しました。それはどちらでもあまり重要ではありません。ウイスラー氏は、確かに、その絵を部分的に破壊しました。そのことは、我々も、判決で述べられた声明から、つまり、チャンブル・デュ・コンゲイル (The Chambre du Conseil) で裁判官自身によって発せられた声明から知っています。しかし、その一方で、それはまだ同じ絵であり、まさに同一のオブジェであり、ウィリアム・エデン卿の財産であることにかわりはありません。

このような状況下で、肖像画に加えられた削除に対して、我々が請求する損害賠償について考えて見ましょう。

我々は、何を奪われたのでしょうか。あなたが切り刻む前の絵は、レディー・エデンの肖像画でした。我々に残ったものはなんのでしょうか。レディー・エデンの肖像画の残骸です。これが、我々が訴えている侵害です。

最初の判決に対するあなた方の主な不服の一つは、裁判所が、その肖像画の引き渡し、代金の返済、そしてさらに1,000フランの損害賠償の支払いを命じたとき、それは本当に行き過ぎたということです。私の博学の友人らは、判決の条件について全く率直ではありません。裁判官は、この絵がウィリアム・エデン卿のものであるという事実(議論の余地はないと思いますが)を認めた上で、この絵を所有者に引き渡すことを命じました。これは、裁判官らが行った声明の論理的帰結であり、裁判官らは実際に行う義務がありました。

「一方、最初の争点では、ウイスラー氏は損害賠償によって100ギニーを返還するように命じられました」。

第2の争点では、裁判官らは、さらに1,000フランの損害賠償、合計3,625フランの支払いを認める判決を下しました。したがって、ウイスラー氏は、絵の代金と絵自体も含めて返還し、さらに損害賠償をするように命じられたというのは、単なる屁理屈でしょう。裁判官らが本当に命じたのは、絵の引き渡しと、上記のように2つの要素に分けられる3,625フランという金額での損害賠償の支払いでした。

しかし、皆さん、私が前にも言ったように、ウィスラー氏がそれほど心を動かされたのは、お金の問題ではありません。

ウィスラー氏の真の目的は評判を立てることです。ウィスラー氏が望んでいるのは、自分の名前が公衆の前で目立つようになること、それが新聞で活字になるのを見ること、そして、自分と自分の作品に注意を向けることです。あなた方に読んでもらった手紙の中で、ウィスラー氏は我々に、自分の目的が何だったのか、なぜ自分が問題を提起したのか、なぜ自分は絵を引き渡す気がなかったにもかかわらず、小切手を保持していたのかを明確に語っています。それは、ウィリアム・エデン卿が、ここパリ市民すべての前で、それを主張させるためです。これこそが、ウィスラー氏は実現したかったことです。

ウィスラー氏は、本件の法的な局面について、幻想を抱くことはできません。ウィスラー氏は、それにしても、彼はあまりにも知的で情報通です。しかし、ウィスラー氏はすべての新聞がこの事件で報じることを願っています。

皆さん。ウィスラー氏とこの作品が裁判所に登場するのは、これが初めてではありません。数年前、ウィスラー氏は「テムズ川の霧 (A Thames Fog)」という絵を展示したことがあります。ラスキン (Mr. Ruskin) 氏は、この機会に、実は自分もその才能を認めていたウィスラー氏が公衆を馬鹿にしていたということは、気持ちのいいものではありません。ウィスラー氏は、ラスキン氏を相手に訴訟を起こしました。裁判官はその絵を製作するように命じました。それは専門家に引き渡され、裁判官は、その専門家に「どう思うか」と尋ねました。専門家はその絵を裏返して、その名前を尋ねました。「テムズ川の霧」です。専門家は、「霧が非常によくできていて、私は本当に何も見えないんですよ」といいました。ウィスラー氏は敗訴しました。

しかし、ウィスラー氏は自然そのものを非難することもできるし、仮に、自然が優しさの兆候を見せなければ、ウィスラー氏は、そうしたかも知れません。時々、ウィスラー氏は、自然が自分の表現した通りではないことに気づき、不愉快になることがあります。しかし、ある日、自然は悔い改めました。誰かが、ウィスラー氏に、自分が描く習慣に非常によく似た風景を指摘しました。「そうですね」と彼は、観察していました。自然は本当に忍び寄って来ます。この進歩を考慮して、ウィスラー氏は、間違いなく、自然を解放したのでしょうか。

皆さん、自然がこの事件では控訴人です。あなた方は、ウイスラー氏の抗弁と情状酌量の状況を聞きました（そのような状況から、私の博学の友人によって主張された点を、我々も認めなければならないと思います）。そのような酌量状況は、ウイスラー氏のために主張されたものでした。あなた方は、疑いの余地のない法的局面について、ある事件に判決を下すこととなりますが、私は、それに対して上訴された判決を、あなた方は承認するだろうと確信しています。

政府に代わって事件を監視していた共和国検事の結論

皆さん

本件の主要な事実を早急に調査する前に、私は、裁判所の許可を得て、ウイスラー氏自身について少しお話させていただきたいと思います。その話は、あなた方に提出させて頂いた問題の検討を容易にし、問題となっている点について結論を出すのに役立つでしょう。ウイスラー氏の崇拜者によると、そのような崇拜者の数は多く、ウイスラー氏はロンドンでは大きな名声を享受しています。ウイスラー氏とその作品をこよなく愛するある評論家が、イギリスにおけるウイスラー氏の名声の一端を紹介しようと、私が再び引用する機会がある作品の中で次のような興味深い発言をしています。「ロンドンのジェームズ・ウイスラー氏に宛てた手紙は、広大な都市を構成する混沌と謎に満ちた騒々しい迷宮を通して、安全かつ迅速に目的地に到達します」。

しかし、ロンドンでは広く知られているウイスラー氏も、海峡を挟んだ反対側のフランスでは、必ずしも万人の賞賛を受けていたわけではなく、ウイスラー氏の作品もほとんど理解されなかった時期もありました。ウイスラー氏は、1863年に「白い少女 (The White Girl)」と名付けた絵をサロンに送り、デビューしました。この絵は審査で落とされたため、ウイスラー氏はこの絵をサロン・デ・レフュス (The Salon des Refuses) に送り、そこでは、今では巨匠と呼ばれるマネ、ドガ、カザンなどの作品に混じって展示されました。ウイスラー氏は、審査を落とされたため、長い間、このサロンを恨んでおり、19年間の絵を送ることを止めて、そのサロンに報復しました。1882年に、ウイスラー氏は、別の肖像画で、サロンでエントリされるといふ勝利を飾り、1883年には、現在、ルクセンブルグの美術館で自分の母親の

肖像画を展示しました。しかし、私はこれ以上追求しません、皆さん。私は、芸術的な博識の裁判所の前で、虚しく披露することを残念に思いますが、このすべてが本件の事実と直接関係しないので、なおさらです。私が示したいことは、ウイスラー氏は、かつてサロンの審査員と戦わなければならなかったが、このサロンでの扱いに不満を持つのも無理はないと思われるが、今ではフランスでもイギリスと同じくらいの評価を得ています。ウイスラー氏は、レジオン・ドヌール勲章を受章しており、1883年にサロンに復帰するきっかけとなった母親の肖像画は、2~3年前からわが国の国立コレクションに収蔵されています。ウイスラー氏は、今、私たちの間で広く知られている人物であり、非常に名誉ある人物です。

皆さん、ここまでのところ、ウイスラー氏の肖像画についてしか話してきませんでしたが、他の作品についてはほとんど触れていません。しかし、ウイスラー氏は、人物や肖像画を描くだけの画家ではありません。ウイスラー氏は風景も描きますが、その風景を彼は「ハーモニーと交響曲 (Harmonies and Symphonies)」と呼んでいます。

皆さん、私は、あなた方に話しました。つまり、フランスの絵愛好家は、1863年に犯した間違いを認識し、サロンの審査員がそれを認めたこと、国自体がウイスラー氏に名誉を与え、我々の国立博物館の扉をウイスラー氏に向けて開放して贖いました。それは、あたかも自然自身が、国家の列車にしたがって、お世辞のレセプションをしたいと切望しているかのようにさえ見えます。そして、これは、本件の議論と一致するような媚びへつらいと一緒にです。ここ数日、我々はウイスラー氏の絵画の中に住んでいたようです。私自身もこの裁判所に向かう途中で、テムズ川の霧をぼんやりと思い起こさせる霧の中に、ウイスラー氏の「淡い金と青の交響曲」が一面に広がっているのを驚きをもって見ました。

それで、それがウイスラー氏です。そして、あなた方がウイスラー氏を知る必要がありました。

私はこの肖像画に一筆だけ手を加えるだろう。ウイスラー氏は、今や、確かな方法で世界的な名声を獲得しましたが、彼は、十分幸運なことに、残された敵は数人しかいません。ウイスラー氏を誤解している評論家や、ウイスラー氏を酷評するアマチュアもいますし、我々の毎年の展覧会に群がってくる一般の公衆もいつも、ウイスラー氏を評価するとは限りません。ウイスラー氏は、幸運なことに、多く議論さ

れて来ました。しかし、幾人かが無関心であったり、敵対的であったりした場合、熱狂的に称賛する人もいますので、それらはバランスが取れています。皆さん。それから、著名な地位にあるすべての人たちと同様に、ウイスラー氏もまた、その芸術的地位が特別な知識に基づいている批評家や賢明なアマチュアの列に続いて、イギリス人が「俗物 (snobs)」と呼ぶ人々の主人、つまり、自分たちの気分や、その日の方法や、瞬間の気まぐれによって動く賞賛者や批判者である人々を見ることとなります。このような既定の崇拜者や非難者に加えて、折衷主義者、つまり誰が描いたかに関係なく優れた絵を楽しむ人々、個人的な感情に偏らず、霧や霞を特別に好むわけでもなく、フランジェヤ (Frangais) ハルビニエス (Frangais) の風景画を賞賛するのと同様に、優れたウイスラー氏を常に心の底から賞賛する人々もいます。このような人々は、作品の起源が何であれ、美しい芸術作品に自分たちの目を奪われ、また、世間の賞賛や批判に支配されることを嫌う賢い人々です。

皆さん、私がすでに申し上げ、繰り返しになりますが、この拙速なスケッチには価値がないわけではありませんが、いくらか本題から外れているように見えるかもしれませぬ。拙速なスケッチは、あなた方に提出された法律上の問題を判断するものではないにしても、少なくとも「ウイスラー」氏の態度を理解するために役立つでしょうし、さらに言えば、その態度を完全に正当化するものでもあります。では、その態度とは何かを検討してみましょう。

まず始めに、この芸術家には、ご存知のように、100ポンドから150ポンドまで、あるいは、100ギニーから150ギニーまでという範囲の金額で、ウイスラー氏がレディー・エデンの肖像画を描くことに合意したという事実に異論はありません。それは、ウイスラー氏とウィリアム・エデン卿の共通の友人によって定められた金額（いわば、100ポンドから150ポンドの間で変動する一定の金額とでもいうのでしょうか）です。ウイスラー氏は、とにかく、仮のものとして、バレンタインデーにウィリアム・エデン卿から贈られた100ポンドの小切手を、損なわれた礼儀で、受け取ったことは否定していません。私がそういうことが許されるならば、打算と儉約のかなりの気配が漂っています。ウイスラー氏は、バレンタインを受領した後、謝辞を書いた皮肉の手紙の中で、ウイスラー氏が仄めかした最後の一笔を追加し、ウイスラー氏は、さらに、1894年にその肖像画を展示したことを認めました。

私は、あなた方の許可を得て、すでに仄めかされた批判的手紙から1文ないしは

2文を読み上げたいと思います。これは、ウイスラー氏の才能、あるいは、むしろ天才については、私の最後の言葉となるでしょう。これを読めば、ウイスラー氏自身をはっきりと判断し、彼の姿勢を理解することができるようになるでしょう。1つ目は、今回の訴訟の対象となっている「ブラウン & ゴールド (Brown and Gold)」として展示された絵に関するものです。

『「ブラウン & ゴールド」です。ソファに座る女性です。驚異的な配列とグラデーション (音色ですか)』。

この評論家は、ウイスラー氏が描いた M. de M. の肖像画に2ページを割いています。ここでは、私は、その中から数行を読み上げます。

「ウイスラー氏は、この繊細な個性の肖像画家であり、モデルと画家の間にこれほど親密な調和があったことはありません。夜景画やハーモニーの芸術家であり、肖像画のこの上なく寡黙な創作者であり、女性的な幻影と知的表現の魔法使いは、M. de M のダンディズムに、ウイスラー氏自身の性格の基礎にあるダンディズムの基盤に強い魅力を感じたに違いありません。ウイスラー氏は、この個性において自然的なものと人工的なものとの両方に同情していました。この個性は、高度な文明の中でしか開花し得なかった存在です。

皆さん、これは、優秀な批評家がウイスラー氏のモデルに対する見事な理解について、自分自身を表現する方法です。私が読み上げた文章は、あなた方が、法的立場から、それらを宣告する前に、その行動をあなた方が理解しなければならない人物を評価することができるでしょう。評論家のコメントに私が一言付け加えることをお許しください。ウイスラー氏の芸術的傾向についてどのような意見があろうとも、M.de M. の肖像画は確かに最も注目すべき作品でした。

さて、皆さん、ウイスラー氏は、私がこれまで説明してきたすべての事実 (ビジネスの提案、約束、お金の受領、1894年のサロン・デュ・シャン・ド・マルスでの肖像画の展示) を認めた上で、ウイスラー氏は、同じ年 (1894年) の末に、ウィリアム・エデン卿がその肖像画を要求したとき、ウイスラー氏は、その肖像画を手放すことを拒否し、そして、法がウイスラー氏自身に引き渡しを「為させ」ようと始動した時に、ウイスラー氏は、むしろ肖像画を消して「為す」ことを選んだということも認めました。

皆さん、これはウイスラー氏の側での冷静で慎重な意思行為であり、私がこの芸

術家について少し長く語る必要があると考えた理由を説明する行為でした。その行為は、彼に由来する論理的な行動ですが、その彼とはウイスラー氏です。また、ウイスラー氏だけではなくありません。彼は「ウイスラー主義 (Whistlerism) とウイスラー主義者 (Whistlerism)」を代表しています。このフレーズは私のものではありません。私はすでに引用している批評家から再び引用します。ウイスラー氏は、自分自身のため、ウイスラー主義のため、そしてすべてのウイスラー主義者のためにその絵を所有し、ウイスラー氏は、ウィリアム・エデン卿にだまされることも許さなかった。それが、ウイスラー氏が肖像画の引き渡しを拒否した理由でした。しかし、その一方で、今、私が近づいている法的問題を考慮すると、私は、あなた方に、これをあまり強く強調することはできません。つまり、最初から、ウイスラー氏が100ポンドを返却することを申し出ています。ウイスラー氏は、完全に、この義務を認識しています。あなた方が覚えているように、ウイスラー氏は、裁判所の判決に屈しさえもしています。その判決は、ウイスラー氏に40ポンドの範囲で損害を賠償するように命じました。

ウイスラー氏が、個人的自由、全ての芸術家の自由、芸術の独立と主権の名義のもとで、抵抗した物は、判決でした。自分にその絵を現在の状況で引き渡すことを命じた判決です。

裁判所がウイスラー氏に絵を引き渡すように命じたのは正当なことなのか、それともウイスラー氏が引き渡しを拒否したのは正当なことなのか。皆さん、これは、あなた方の前に持ち込まれた唯一の問題です。

この問題の解決が、控訴の唯一の目的です。控訴の必然的な一般的な形式にもかかわらず、あなた方は、それがウイスラー氏の弁護士が懸念していた唯一の問題であることはご存知でしょう。私は裁判所が間違っていたと信じることに、何らためらいはありません。その判決ミスの原因は、もう一つミスです。あなた方がそのミス指を指して示すことができるでしょう。裁判所は、もともとの契約、無名の契約、混合契約、いずれにせよ必ず義務がある瞬間、売却契約を構成するように絡み合うようになるということを考えていたようです。それは、裁判所の結論を策定する際に到着した契約当事者の関係に販売の法則を適用することによってでした。皆さん。私があなた方にはっきりと、指摘しなければならないので、下級裁判所が下した判決書を3ページほど読ませてもらいます。

「一方、最初の裁判官は、まず、共通の友人の仲介のお陰で、エデン卿はウィスラー氏によるレディー・エデンの肖像画の入手を望み、ウィスラー氏は、その肖像画を描くことに同意したということが立証されたと述べています」。

「一方、同じ人物の仲介により、ウィスラー氏の作品の価格は100ギニーから150ギニーの間に固定されました」。「一方、したがって、対象物と価格に関して合意に達したことで、ウィスラー氏は、その肖像画を描く義務と、エデン卿は、その代価を支払う義務を契約しました」。

皆さん、これは、確かに、たとえば、法律学が常に認め、説明してきた画家と購入希望者の間に存在する契約です。それは、現在、私が引用する単純な例示からあなた方も理解されるでしょう。

「一方、ウィスラー氏はその義務を果たし、レディー・エデンの肖像画を描きました」。

「一方、エデン卿は、自分の側では、1894年2月14日、ウィスラー氏に105ポンドの小切手を送っているが、105ポンドは、2,625フランに当たる」と。

「ウィスラー氏は、小切手を受け取ったが、エデン卿に手紙で返事を出しました。その手紙の前半は、送られた金額と実際に受け取った金額を暗示しており、多少の皮肉が込められているのは間違いないですが、しかし、手紙の後半では、芸術家は、お金の問題はさておき、自分の作品に満足していることがよくわかります。この小さな絵が、我々みんなにとって価値のあるものになるようにという願いが込められていることが示されています。ウィスラー氏が言うように、レディー・エデンの親切な約束を頼りに、我々が知っているいくつかの小さなタッチを加えることを許可してもらい、ウィスラー氏のモデルの「彼女の勇気と優しさ」を褒め、エデン卿への最高の願いを込めています」。

「一方、1894年2月14日というこの日以降、エデン卿とウィスラー氏の間には礼儀正しい関係が続いていました」。

「一方、ウィスラー氏は作品を完全に完成させ、エデン卿の暗黙の了解を得て、シャン・ド・マルスのサロンで、他の作品とともに、1187という番号で、タイトルは『ブラウンとゴールド、レディーEの肖像』として展示しました」。

「一方、エデン卿が価格に関して、固定された最低価格を支払うことを選択したという事実も、ウィスラー氏とエデン卿の間に結ばれた契約の性質を変えることはで

きません」。

「ウイスラー氏は肖像画を描いて引き渡すという厳しい義務を負っていたのに対し、エデン卿が支払った価格が不十分であると考えた場合、友好的な手段あるいは法的手続によって、この価格はより最大値に近い金額に修正するように要求することもできましたが、しかし、ウイスラー氏は決してそのような主張はしませんでした」。

皆さん。これまでのところ、交わされた主張は全く健全です。裁判所は、為す契約も、芸術家とアマチュアの間で結ばれたそのような契約の例外的な性質も、法律によって確立されたものとして認めています。しかし、我々は、今、裁判所が道を踏み外し、私が批判する判決に誘導された2つの争点について説明します。

「ウイスラー氏は、小切手を受け取っており、この事実は価格に対するウイスラー氏が正式に同意したことを証明するものです」。

「一方、この瞬間から、ウイスラー氏が描き、エデンが支払った肖像画は、その部分的にも全部としても、エデンの排他的財産となりました」。

その時の裁判所の判決によると、もともとの契約の全体的な性質は、小切手が受領されたことで直接に変化しました。つまり、2月14日からは、為す義務が売却すべき義務に取って代わられました。対象物とその価格が合意され、さらに価格が支払われた契約では、その対象物を注文して代金を支払った者が、部分的にしる、全体にしる、その所有者になり、この瞬間から、その判決によると、画家は自分の同意を為すことを拒否する権利を失い、そして、拒否した場合には、自ら損害賠償責任を負うことになります。

引き渡しを拒否する権利は、常に法律上認められています。

皆さん。数多くの先例を引用することができますが、私は、このようなケースの契約当事者のそれぞれの地位を数行でまとめたある先例に限りて引用することにします。

これは、1865年7月4日にパリ控訴院裁判所第1法院(The First Chamber of the Court of Appeal in Paris)が下した判決で、ロサ・ボヌール(Rosa Bonheur, 1822-1899)と、彼女が引き渡しを拒否した複数の絵の注文主との間で争われた訴訟です。私は、契約の性質を定義づけ、画家と依頼人のそれぞれの権利を定めた2つの条項を読み上げます。「為す義務の不履行は、それ自体が損害賠償の問題に転換され、売

主自身がそのような条件に同意しなければ、その限度で、1日、遅滞するごとに金銭的な罰金をもって、契約を履行するのに一定の期間を固定する根拠は全く存在しません」。

「そして、その契約の特別な性質と、ロサ・ボヌールが自分の義務を為すことを正式に拒否したことを考慮すると、我々は損害賠償の問題についてしか、公に論じることができません」。

本件下級審裁判所は、1865年7月4日にパリ控訴院裁判所第一法院「ロサ・ボヌール」事件判決を知っていたし、この「ロサ・ボヌール」事件判決と関連する法律学の原理も知悉していたが、契約が実際の販売に取って代わられたと仮定することによって、この問題を回避しました。そして、1894年2月14日、ウィリアム・エデン卿がその作品に満足したと宣言し、ウィスラー氏に100ギニーを支払った日に、エデン卿がその絵の所有者になったと宣言しました。

皆さん、あなた方がそのような理論を支持した場合、どのような結果になるのでしょうか。我々がいえることは、アマチュアは画家と交渉して、それから絵を注文するということでしょう。しばらくすると、アマチュアは、その理論について、ほとんど何も知らないので、恐らく、まだスケッチに過ぎない絵に満足します。アマチュアは、その絵を慌てて手に入れようとするでしょう。アマチュアは、画家に対してその絵の代金を提供して、画家はそれを受領すると、アマチュアは、前払いを受領してくれたことに感謝するでしょう（アマチュアも、時々、芸術家に全く支払われないことを知っています）。このような状況では、芸術家が不遜にもブルジョアや「俗物 (Philistines)」と呼ぶアマチュアは、芸術作品の完成度、完了と未完了の単独の判断者となり、画家も何も言えなくなってしまいます。軽率であり貧乏な芸術家は、自分の絵を完成させる前にお金を取ってしまった場合、そのような芸術家は、不完全な作品を引き渡さなければならず、その作品は、彼の現在の名声を損ない、さらに将来の名声をも損ねることになります。なぜなら、代金を支払った購入者は、部分的に、あるいは全体としてその作品の承認された所有者になるからです。一言で言えば、芸術家が自分自身に満足していない作品を引き渡さない権利は、慣習からも、法律学の記録からも抹消されてしまうことになるでしょう。

思うに、あの下級審裁判所は、あの訴訟に関連した特別な状況に惑わされたのだと思います。

私は、ウイスラー氏が自ら認めた絵の引き渡しを断った理由について述べていますが、ウイスラー氏自身もそれを否定しようとはしていません。ウイスラー氏が断ったのは、ウィリアム・エデン卿に自尊心を傷つけられたからです。ウイスラー氏は、ウィリアム・エデン卿のやり方に辛酸を舐めました。つまり、エデン卿は、ウイスラー氏に150ポンド送るべきところ、100ポンドしか送らなかったが、その時、少なくとも、エデン卿は、ウイスラー氏と、自分が送らなければならなかった100ポンドと150ポンドの間の額について協議すべきでした。

絵そのものについては、ウイスラー氏は素晴らしいと思い、それを公けに展示しました。私が引用した評論家は、それを「配列と音色の驚異」と評しています。ウイスラー氏自身も、フィガロ紙に掲載されたインタビューで、それは「小さな傑作」であると語っています。この言葉は完全に正しい。

その時、ウイスラー氏がこの絵を引き渡すことを拒否したのは、作品自体に欠陥があって、それによって自分の評判が傷つけられるからではなく、ウィリアム卿との間、つまり、男と男、紳士と紳士の間での喧嘩になったという事実が原因でした。

下級審裁判所はこの理由を悪いものと考えました。私自身としては、あの下級審裁判所はその点で間違いを犯したと感じています。

芸術家とは、契約の為す行為を拒否する理由を説明するように求められることからありません。芸術家は、自分の約束を実行することを拒否し、あえて損害賠償を支払うというチャンスを選択したとしても、それは、芸術家の権利の範囲内です。芸術家のこの権利は絶対的なものであり、ウイスラー氏は、絵の引き渡しを拒否した時、単にその権利を行使したに過ぎません。

さて、皆さん。ウイスラー氏の訴訟相手方は、ウイスラー氏にその絵を引き渡すように迫ってくるでしょう。これは、我々を私の以前の主張に戻します。画家は、少なくとも主要な部分では、比較的形のない作品を引き渡さざるを得ないでしょう。

ウイスラー氏が、肖像画のためにブラウンとゴールドのハーモニーを描いた時、そのモデルの特徴を再現するためだったのではないのでしょうか。しかし、これらはもう存在しません。「ハーモニー」が未だに残っていて、その中の白い部分が頭部の位置を示していますが、ウイスラー氏は、意図的に肖像を消しています。ウイスラー氏は、自分の行為によって罰則を受けることは甘受しながらも、その絵を引き渡すことは拒否しています。ウイスラー氏は、甘んじて、損害賠償に利息をつけて支払

うつもりです。あとは、この罰金の金額を確定するだけです。思うに、ウィスラー氏は、100ギニーを1894年2月から5%の利息を付けて返金し、さらに、1,000フラン(40ポンド)の損害に利息を付けて、裁判所に支払うならば、十分な損害賠償をしたことになるでしょう。「ジョージ・ムーア氏(George Moore)の仲介により、実際には500ギニーの価値があるものを100ギニーで手に入れることができた」とウィリアム・エデン卿が言う覚悟がなければ、この金額の差が些細であるという理由で、この100ギニーという金額に異論を唱えるのには無理があるでしょう。ウィスラー氏の悪意と気まぐれによって、私は、結果的に500ギニーの価値がある作品を奪われてしまった。「それでは、私が支払った金額の2倍、3倍、4倍の金額で、あなた方が私に同意してくれることをお願いします」。

第1審裁判所に、ウィリアム・エデン卿が、損失または約2,500フランの費用がかかった肖像画のために10,000フランの損害賠償を主張したとき、いくつかのそのような主張はウィリアム・エデン卿の心の中にあつたようです。ウィリアム・エデン卿は、この裁判所では、そのような理論を二度と口にしようとはしませんでした。私は彼の性根を驚くほどよく理解しています。再開すると、皆さん、私は、損害賠償の額とその100ギニーの返金に関して、下級審裁判所の判決を確認します。

私はウィスラー氏がウィリアム・エデン卿にその絵を引き渡す義務に関しては、下級審裁判所の判決に反対です。このような状況下で、仮に、裁判所が私と同じ意見であれば、裁判所は、私の意見には賛成できずに、これらの解決を修正しなければならぬでしょう。

判 決

裁判所

原告と被告の弁護士、および共和国検事の総括を聴取し、1895年3月20日に下されたセヌ民事裁判所の判決に対する被告ウィスラーの控訴について判決を下すことを求められた。被告が控訴する判決に記載されている合意は、単に為す契約で構成され、為されなかった場合には、被告は損害賠償の責任を負うことになっている。そして、ウィリアム・エデンは、いかなる時も、座った自分の妻の絵の所有者ではなかったし、この画家が、気まぐれか、自尊心によって動かされ、要求されて

いる問題の肖像画を引き渡すことを拒否したと主張しているに過ぎない。

上記のように約束を守らなかったウイスラーは、エデンから受け取った2,625フラン(100ギニー)を、支払い日から5%の利息をつけて返還し、さらに1,000フラン(40ポンド)の損害賠償を支払わなければならないので、以下の通りとする。

しかし、下級裁判所の裁判官は、ウイスラーがいたずらに改変した肖像画は、エデンの排他的財産であり、エデンに引き渡たされるべきであるという理由で、ウイスラーに対して、エデンに引き渡すように不当にも命令し、また同様に、当事者間の契約は、販売契約ではなく、単なる為す義務であったため、肖像画は、芸術家の財産であることに変わりはなく、芸術家の同意なしに、芸術家から奪うことはできない。

一方、この肖像画は、いくつかの本質的部分が変更されているとはいえ、レディー・エデンから与えられたある動機の助けを借りて、この芸術家によって、彼の作品に与えられた全体的なハーモニーを未だに保っており、このような状況下では、この絵に対するこの画家の権利は、制限や禁止もない絶対的なものではないことは、明らかであると思われる。反対に、この小さな絵の改変が完全でない限り、ウイスラーは、その絵を、公私を問わずにどのようにも利用することはできない。

これにより、重要な事実を記載している限り、上訴がなされた判決を確認する。

そして、控訴人に対し、ウィリアム・エデンから支払われた2,625フラン(100ギニー)に1894年2月14日から5パーセントの利息を付して返還し、1,000フラン(40ポンド)の損害賠償に利息を付して支払うように命じることを確認した。

しかし、ルールによれば、契約当事者が対象物と価格について合意するとすぐに、ウィリアム・エデンがその絵の所有者になったと宣言する際に、その判決には誤りがあったという。

その判決のこの条項を修正して、新たに宣告することで、裁判所は、当事者間の契約が、単なる為す債務の合意であり、為されなければ、損害賠償の問題で解決されると宣言した。したがって、芸術家が自主的に自分の作品を引き渡し、そしてその所有権を諦めるまでは、芸術家は自分の作品の主人であり所有者であるとした。

これは、下級審裁判所がウイスラーに課したウィリアム・エデへの肖像権を放棄する義務をすべて解消するものであるが、一方で、作品が未完成であり、引き渡しに適さない状態である限り、ウイスラーは、公私を問わず、その作品をいかなる形

フランスで最初に著作権人格権が認められたという事件簿

でも利用することができないと宣言するものである。

当裁判所は、ウィスラーには第1審裁判の訴訟費用、ウィリアム・エデンには控訴審裁判の訴訟費用の支払いを命じるものとする。

罰金は、返金されるものとする。